



Ninja Soul 2

kiyohiko yashima

目次

大日本帝国の開国	1
黄泉の郷で盆踊り	5
天狗王の逆襲	9
甲賀盗賊五人衆	13
魔縁山で天狗王と決着	16
奠都の東京へ向かう	21
斬妖刀争奪戦	24
魔女の棲む館	28
餓狼の血族	37
開花	
開化	
餓狼の血族	
奥付	
奥付	55

大日本帝国の開国

幕末の頃、徳川慶喜が忍びの者たちだけ廃刀令を下したが、それに反論する伊賀の忍びたちの伊賀の里を幕軍兵が攻めて壊滅した。伊賀の里の忍者たちは忍者刀を奪われて忍びの魂を捨てた。しかし、相生勇（そうじょういさむ）だけは徳川家康から服部半蔵に、半蔵から相生悟（そうじょうさとる）に手渡った悪霊祓いの斬妖刀を渡さまいと必死で守って、大鷹に乗って伊賀の里から離れていった。大坂城にいる慶喜のところにやってきて、廃刀令を身送らしてほしいと、訴え出たけど慶喜が烏天狗（からすてんぐ）となって、どこかへ飛び立っていった。偽物の慶喜だった烏天狗を大鷹に乗って、追っていくたびに雨河童（あまがっば）と鬼夜叉（おにやしゃ）の物の怪に出くわしていった。地図に載ってない悪霊島と噂された阿修羅島へ向かっていった烏天狗と雨河童と鬼夜叉の三冠王（さんかんのう）を追って、勇と途中で出会った妹の雛形愛（ひながたあい）は阿修羅島に降り立った。三冠王は時空転送の門をくぐり抜けて行って、未来の大和を征服する陰謀を企てていた。それを阻止しようと勇と愛と埋蔵金を狙って現れた甲賀盗賊団の新崎渉（しんざきわたる）と一緒に戦ったが、三冠王に敗れた。だが伊賀の里で攻撃を受けて亡くなっていたはずの勇と愛の父の相生泰三（そうじょうたいぞう）が現れて勇と愛と泰三と渉で時空転送の門をくぐっていった三冠王を追っていった。雨河童は仁徳天皇陵古墳の仁徳天皇のミイラが百舌鳥（もず）となって、羽ばたいていった後の陵墓に埋蔵金と悪霊を入れて封印していた。三冠王は孝明天皇の高い地位を得て人間になるために蚕蛾（かいこが）を使って囚われていた孝明天皇を蚕蛾の蛹の絹糸に包み込み繭（まゆ）を作り出して繭の殻を破り、蚕蛾人間となって、肉食植物の捕虫葉の臭い水に入り、種子内に包まれた三冠王へ栄養を吸収させて三体の胚珠から人間となった三冠王が現れた。三冠王は時空転送の門をくぐり抜ける前から、烏天狗を烏田崇（からすだたかし）で雨河童を河村薫（かわむらかおる）で鬼夜叉を鬼頭徹（おにととおる）として名を変えて未来で生きることになっていたが、勇に妖力の残った臭いで三冠王であることを見破られた。仁徳天皇陵の陵墓の封印で封じ込めた悪霊を解き払おうとした薫を渉が鎖鎌で斬り裂いて徹を勇が斬妖刀で斬り裂いた。崇は変幻自在の術でどこかへ消え去った。難波の街まで悪霊がさまようて行って、鎧武者が地面から現れた。忍者4人たちは難波の街まで行って、悪霊と鎧武者を斬り裂いていったが、悪霊と鎧武者が集まっていくと、巨大ながしゃがしゃどくろとなった。4人の忍者たちは協力しあって地面に倒れたが、しゃがしゃどくろを勇が斬妖刀で頭蓋骨を突いて倒した。だけがしゃがしゃは5体の黒いカルマとなって、どこかへ散らばっていった。烏天狗に

3分1戻った崇は政治家となって、人間の世を物の怪に支配しようと企んだ。勇は相生勇斗（あいおいゆうと）に名を変えて日本史の高校教師となって、身を隠して斬妖刀を持つ宿命として、物の怪退治を最後の任務とした。愛は雛形愛美（ひながたまなみ）に名を変えて花屋で泰三は歌舞伎座の役者で涉は金具屋で身を隠した。5体のカルマは散らばって、大阪に3体の物の怪と2体の物の怪に生まれ変わって街を襲い始めた。勇は烏天狗の弱点を探して斬り裂いて、5体の物の怪すべて斬り裂いた。勇と涉は5体の物の怪を倒して現れた埋蔵金を分け合った。地獄から這い上がってきた三冠王は、しもべの九尾狐を使って邪教を企み人々に信仰させて鬼子の魂を受けた阿修羅像から三冠王が3面で6本の腕を持った擬人化したマドゥーとなって蘇って再び征服を企んだが、阻止できた。勇はスキー合宿にきた雪山で遭難して小雪娘と出会う街で再び出会った小雪娘が勇の自宅マンション近くまで来ていて、人間になりたいと願う小雪娘を愛だか抱きしめて、人間にすることにできた。小雪娘は川村沙織（かわむらさおり）として、勇斗と恋人で共に生きることにした。時空転送の門を九尾狐に破壊されていたが、勇のマンションの屋上に突如と現れたパピュラス星人によって、再び時空転送の門を置かれて蘇った孝明天皇と勇と沙織と愛と泰三と涉は、時空転送の門をくぐって、時は明治元年の大日本帝国に帰還した。勇と泰三と涉は兵隊にとられて、戊辰戦争で京都御所で明治天皇を守るため新政府軍として、慶喜率いる旧幕府軍と一騎打ちした。またしても偽物の慶喜は悪魔のルシファーシールドとなって、旧幕軍兵が悪霊となって戦い始めた。勇と泰三と涉と風丸翔（かざまるしょう）率いる甲賀盗賊団が加わって、忍術と武器を使ってルシファーシールドと悪霊たちを倒した。1854年江戸時代末期、いきなり江戸湾浦賀に黒船来航したアメリカ合衆国軍東インド艦隊のペルーは幕府にカリフォルニアで銀と水銀と宝石などと千万ドルの金を産出していることで友好と貿易と石炭と必需品の供給を求めた国書を渡した。日本はオランダ以外の貿易を禁止する鎖国していたが、それを受け入れて日本和親条約を結び開国した。この事件から明治維新までを幕末とする。明治元年明治時代初期で横浜港に友好を認めたイギリスとロシアとオランダから外国人が入国してきた。外来物が入ってきた商店街の馬車道を歩く日本人に洋服を着た人が少し増えた。摂津の国（大阪）にて、時空転送の門をくぐって通過して難波村に着いた筋肉質でやんちゃな相生勇（そうじょういさむ）たちを追ってきた烏天狗（からすてんぐ）のしもべである出稼ぎ者のミラージュは背虫男（せむしおとこ）となって、時空転送の門をくぐって、通過していった。難波村に着いた怪力な背虫男は、三次元装置の配線を引っこ抜いて停止させて、三次元装置を肩からこぶのような背なかに担いで持ち去った。小柄な背虫男は物の怪総長の天狗王のいる愛宕山（あたごやま）を目指して、鉄の固まりの三次元装置を担いで、ひたすら歩いてきた背虫男は、愛宕山を登って行って、たどり着いた愛宕神社に三次元装置を境内（けいだい）の井戸に投げ込んだ。背虫男は、「太郎坊殿！」と呼んで獅子舞のような長い白髪で赤い肌の長い太鼻の天狗王（てんぐおう）が現れた。天狗王は背虫男に、「貴様は誰だ？」と聞いた。背虫男は、「私は烏天狗様のしもべミラージュと申す！烏天狗様から太郎坊殿に会うようにことづけられていたのです」と答えた。天狗王は、「なんの用があるんだ？」と聞いた。背虫男は、「烏天狗様は時空転送の門をくぐり抜けた未来の日本に物の怪界を広めようとしたところに時空転送の門から追ってきた相生勇という忍びの者に斬り裂かれてしまって逝ったので

す！」と答えた。天狗王は、「われの一番弟子の烏天狗か？」と言った。背虫男は天狗王に井戸の底に落とした三次元装置が半分ほど水に浸かっているのを見せて、「時空転送の門を操作する三次元装置です！これがないと作動しません！」と言った。天狗王は、「忍びの者たちはどこにいる？」と聞いた。背虫男は、「私がここにたどり着くまで忍びの男たちは十三里も歩いていくうちに戊辰戦争で京都御所の陣営のために新政府軍の兵隊にとられたようです」と答えた。天狗王は、「よし！忍びどもめ思い知らしてやろう！」と言った。軍隊の休日で里へ帰った勇と泰三は、愛を連れて難波村の空き地にいった。後から涉も約束どおりに難波村の空き地にやってきた。大きな布で覆い隠した時空転送の門の様子を見に来た普段は着物を着ている勇たちは、すぐに時空転送の門の異変に気づいた。勇は、「どこの誰の仕業なんだろう？」と言って勇と愛の実父の坊主頭で体格のいい相生泰三は、「何者かが未来からやってきたようだ！」と言って、勇の妹のお茶目でお転婆な雛形愛（ひながたあい）は、「あれ！三次元装置がないんだけど！」と言って、甲賀盗賊団の長髪の新崎涉は、「誰が盗んだ！」と言った。勇たちはいつの日か何者かがうごめき始めるとして警戒して生きることにした。泰三と勇と涉は西洋銃を持っている軍服を着た兵隊に戻って、愛は勇と同じ実母で姫路城の大奥の女中として、若い頃から化粧檜に佇んでいた朱姫（あけひめ）の雛形朱実（ひながたあけみ）はなぜか疫病で亡くなったと聞いて信じることができずにいた。そしてもう一度会いたいと願って黄泉（よみ）の郷（さと）を探しにいった。勇は未来にいた頃に薩長同盟を成立させたりした坂本龍馬が近江屋宿で京都幕府見廻班の者たちに暗殺されたと思われる謎の事件について考え始めた。勇は一度だけ龍馬に会ったことあるだけに未来で生活していた間、近江屋事件で暗殺された龍馬を時空転送の門から過去に戻って救い出すことができたかと思うと心を惜しんだ。脱藩した元土佐藩士のある海援隊の龍馬は寺田屋で下宿していたときある夜に奉行所の御用となると思ったお龍はお風呂から裸で出て龍馬に知らせて逃したが、龍馬の護衛のためにいた薙刀の達人に見守られていながら危ういときは長州藩士から護身のために受け取った銃で捕り方100人のうちの2人射殺して数人を怪我させて大事な資料を忘れていった。龍馬は捕り方の刀を払うのに銃を盾にして手を斬り裂かれて負傷して、出血しながらも捕り方から逃げ隠れて、どうにかして薩摩藩邸に着いて療養した。しばらくは龍馬とお龍は薩摩藩船に乗って薩摩（鹿児島）に渡って龍馬とお龍は結婚して新婚旅行を霧島温泉郷や霧島神宮など巡って郷土料理などを食べて傷を癒した。龍馬は二度も訪れた薩摩で薩摩藩主の西郷隆盛と倒幕の計画を図（はか）った。龍馬はお龍を長州（山口）の姉のいる家に預けて寺田屋で来襲された京の都に龍馬は戻って薩摩藩の主導のもとで成立させた四侯会議（しこうかいぎ）に入り込んだ。徳川家15代目将軍の徳川慶喜に対して大名経験者3名と藩の最高権力者1名のなかで会議が始まって天皇を中心とした政治体制と神戸港の開港と長州藩の処分問題についてのことであった。会議中に乱入した龍馬は慶喜に、「天皇に返上を願う！」と申しした。慶喜は、「お主は何者だ？」と聞いた。革命児の龍馬は、「桂小五郎という者や！農民が年貢を納められずに百姓一揆ばかり起りよる！このままじゃいかんやろが！」と答えた。龍馬は見張人に、「無礼者が！外に出ろ！」と言われて、そこから追い出されて階段を駆け落ちた。立ち上がった龍馬の前に黒頭巾の黒い装束を装った勇が現れた。勇は、「大丈夫です！」と尋ねた。龍馬は勇に、「大丈夫な訳ないやろ！おまんは誰や？」と聞

いた。黒頭巾をはずした勇は、「伊賀の勇と申す！ 龍馬さんのことは幕府に攻撃を受けていた長州藩と仲悪かった薩摩藩の仲介に入って薩長同盟を成立させたことは知ってます！」と答えた。龍馬は、「ええ顔しちゅーやないか！ わしが有名になる気ないがよ！ 土佐藩を脱藩して剣術を学ぶために船で江戸に移って黒船7隻がやってきたときから新しい国造りを目指して大政奉還（たいせいほうかん）を狙うちゅう」と言った。勇は、「そうですか！ 俺は慶喜に廃刀令を実施すること見送りしてもらうためにやってきた！」と言った。龍馬は、「やめたほうがええ！ どうせいつかみな刀を持てんなる」と言った。勇は、「そうですね！ 徳川家の三つ葉葵の家紋のある刀を返す気はない」と言った。龍馬は、「わしは幕府崩壊が成立したら蝦夷地（北海道）に大国を造ることが夢なんや！ それまでに世界に劣（おと）ることがない和を築き上げるんだ！」と言った。勇は、「すごいですね！」と言った。龍馬は、「わしは幕府に狙われ身だ！ ここにおってはいかんぜよ！ それじゃあが」と言って駆けていった。薩摩藩は慶喜の権力に勝てず完全に倒幕を図れなかった。だが藩士がイギリス人を斬り裂いたために薩摩湾でイギリスの支援を受けていた薩摩とイギリスが激突した薩英戦争が起きた。フランスの支援を受けていた幕府は、友好のあったフランスが江戸までに占領してくることを避けたかった。幕府が天皇の下の機関に過ぎないと考えた慶喜は時間に遅れてきて、6人ぐらいの少人数で大政奉還を行われて天皇に中央政権を返上した。大政奉還後も水戸藩士の息子で政治家の慶喜率いる幕末に土佐藩尊王攘夷の結社で土佐勤王党の佐幕派の集まった旧幕府軍と薩長の討幕派が集まった新政府軍によって鳥羽・伏見の戦いが起きた。慶喜は激動時代の秀忠率いる徳川軍と大坂城を守る秀頼率いる豊臣軍の大坂の陣のように新政府軍と旧幕府軍の間で再び起きた。慶喜は新政府軍の清須城へ攻めていったが、敵の天皇旗を見た途端ガトリング銃などの西洋式新兵器に敵わず大坂城へ引き返して城の裏口から出て、江戸に逃げて身を隠した。争いのために刀を用いるので忍び以外の廃刀令は10年後に見送られた。元土佐藩脱藩浪士の坂本龍馬が幕府解体で職を失った若い浪士たちの闘志で蝦夷地開拓と防衛を龍馬の夢を実現したいと思うようになった。1869年、新政府軍と旧幕府脱走軍の箱館戦争が起きて日本唯一の西洋式城郭の五稜郭（ごりょうかく）を基地にした旧幕府脱走軍は西洋式陸軍の訓練のためにと蝦夷共和国へ派遣されたフランス軍事顧問団が戊辰戦争に参加して新政府軍の攻撃をかわしては挟み撃ち攻撃した。しかし、新政府軍は大砲とガトリング砲を通さない甲鉄の戦艦から旧幕府軍の艦隊に大砲とガトリング撃っていった、旧幕府軍の艦隊は海に流れて沈没した。五稜郭基地が海の近くにあったために戦艦から大砲を撃っていった、五稜郭基地を爆裂した。旧幕府脱走軍は敗北して、蝦夷地まで追い詰めた大規模な戊辰戦争の動乱が終結した。260年も続いた江戸幕府は崩壊した。

黄泉の郷で盆踊り

徴兵令布告を受けた勇たちの男衆は戊辰戦争が終えて泰三と勇は伊賀の涉は里と甲賀の里に戻るようになった。勇と涉は未来で悪霊の物の怪を倒して埋蔵金の大金を手にして警視庁に届け出をして80パーセントが戻って、40パーセントずつ山分けにした。本来は文化財保護法で20パーセントだけ戻って10パーセントずつ山分けにするはずだったが、物の怪から現れたお宝のために信長の埋蔵金かわからなくなったために運が良かった。軍の兵隊に取られる前に勇と涉はひと気の少ない難波村の納屋にあった蛸壺（たこつぼ）の中に入れて、畑近くの土に埋め隠しておいた小判だらけの大金袋を探し出して、勇は伊賀の里で屋敷の復興に使う横濱の銀行に貯金に収めるために隠した。涉は甲賀の里で大名に劣化した城の修復代の大金の2割を手渡して、盗人である汚名の身柄を取消しされた。泰三は愛と涉から回収した卍剣（まんじけん）と鎖鎌（くさりがま）を薙刀（なぎなた）のすべてを大坂城の櫓に戻さずいた。勇は相生家の家宝である護り刀の斬妖刀を明治天皇に納めたが牙を抜かれたように無防備でいた。志賀高原で遭難した勇に愛だかで暖めてと願う小雪娘は、人間になれた勇の恋人で着物姿の川村沙織（かわむらさおり）は伊賀の里で無事に勇と暮らしていた。伊賀の里にて、悪い物の怪はいなくなっている物の怪が残って人間たちの手伝いをする物の怪もいた。大鷹に乗った勇と愛が阿修羅島へいくまでに襲った海坊主（うみぼうず）が巨人のだいだらぼっちとなって重たい物を持ってくれたりと忍びの屋敷の建て直しに協力した。忍び屋敷で、勇と沙織は囲炉裏（いろり）の炭に火を点けて自在鉤（じざいかぎ）に吊るした鍋で煮込んだ味噌仕立てけんちん汁を食べながら勇は沙織に、「俺は鬼に金棒を探しに出ようかと思う」と言った。沙織は、「えっ！ もう悪い物の怪はいなくなった！ 戦（いくさ）も終わったことだし平和に暮らそうよ！」と言った。勇は、「俺たちが時空転送の門をくぐってきた後で、知らない者が時空転送の門をくぐってきているだろう！ 武器がないと忍術だけでは手持ちぶたさだよ！」と言った。沙織は、「それじゃあ！ また邪悪な敵が現れるかも知れないから武器を持ったほうがいい！」と言った。空から運んできた鷺が手紙を読んだ勇は、「元孝明天皇が未来から帰還できたことを讃えて報酬として明治天皇に手渡した斬妖刀を返してくださるそうさ！」と言った。沙織は、「だけど明治天皇は東京にいるんでしょう！」と言った。勇は、「そうさ！ だから近々に俺は東京へ向かうのさ！」と言った。甲賀の隠れ里にて、長髪で蒼色の装束を装った涉は風丸翔（かざまるしょう）に代わって甲賀盗賊団長となってなんでもある祇園を訪れて電飾の光に代わるようなちょうちんがぶらさがる商店街の道具屋で入手したサイとヌンチャクとトンファーとクナイ（苦無）を涉が率いる甲賀盗賊五人衆に与えた。痩せ型で紫色の装束を装った鈴木晃（すずきひかる）にサイを筋肉質で黄緑色の装束を装った池上修（い

けがみおさむ）にヌンチャクを身軽るで橙色の装束を装った山河湊（やまかわみなど）にトンファーをごっつい短髪で茶色の装束を装った渡辺登（わたなべのぼる）にクナイを渡した。渉は何者かが時空転送の門をくぐってきた非常に備えて武術を部下に棍棒槍を使って教え込んでいた。献身なまで活動をしてきた甲賀盗賊五人衆は、優れた武術を身につけていった。伊賀の里を離れていった勇は鬼に金棒を探しに極楽山を登ったやさきに樹木の宿る精霊の木霊（こだま）から山や谷で音が反射してくるなかで二つの道の分岐点にたどり着いたところで山彦（やまびこ）に会った。山彦は勇に、「どこにいくんだい？」と聞いた。勇は、「なんだよおまえ！俺は鬼に金棒を探しにやってきた。どこかに強力な武器を持っている者がいないか？」と聞いた。道しるべの山彦は、「おらは山彦の案内人だべ！左に行けば黄泉の郷だべ！右に行けば鬼の棲む洞窟だべ！」と答えた。勇は、「山鬼の住む側に行ったほうが良さそうだ！ありがとう！」と言って右に進んでいった。勇は木の枝を断ち切って余した布を巻きつけて火炎火遁の術で火をともしたたいまつにして洞窟の中に入っていった。そこに鬼灯（ほおずき）を持った赤鬼が現れた。山鬼は勇に、「なんのようだ！ここはわしの家だ」と言った。勇は、「赤鬼！おまえの持っている鬼灯を譲ってくれないか？タダとはいわない」と聞いた。山鬼は、「この鬼灯はわしのだ！いくら金を出しても譲らん！」と答えた。勇は、「そうか！大事な金棒だ！無理は言わん！じゃあね！」と言って去ろうとしたら、赤鬼は、「ちょっと待て！黄泉の郷の主に分ければいい、噂によると物の怪退治できる金棒があるようだ！」と言った。勇は、「どうも！ではいってみる！」と言って分岐点に戻って、左側の黄泉の郷に進み始めた。再び現れた山彦は勇を睨（にら）み、「黄泉の郷に行くだべか？」と聞いた。勇は、「そうだが！そこに行けば物の怪退治できる金棒があるんだ！」と答えた。山彦は、「言っとくがな！黄泉の郷は死者の集う場所だべ！物の怪たちの集う場所でもあるべ！」と言った。勇は、「そんなことを言われても心齋橋の商店街に木刀さきも売ってないんだ！東京へ向かうのに武器がないと乗り切れないんだよ！」と言った。山彦は、「だべだか！くれぐれも支配人には気をつけなされ」と言って去った。勇は極楽山のふもとを下ってきたところに三途の川のある谷間で、死者と物の怪が触れ合う祭りに出会う人と物の怪たちが盆踊りを集いどよめく舞台の上で舞妓の鈴木初音（すずきはつね）の舞を見ていた勇は、死者だと思っていた華美（かび）の初音は舞を済ましていきなりろくろ首となって、物の怪だったのかと残念に思った。芸妓と阿亀（おかめ）の花魁（おいらん）のおぼはんの芸者遊びを見た後で、芸妓はなまはげとなって、花魁は顔と体の区別がつかないほど、肉の塊が垂れ落ちたぬっぺぼうとなった。布一面に出来た一反木綿（いったんもめん）に覆われた醜い獣の白布（しろぬの）が司会で喉自慢合戦が開かれた。音頭を歌い出して、熱唱する若い男は歌い終わると、全身に包帯を巻いたゾンビのミイラ男になった。無理して歌謡曲を歌う中年男は歌い終わると、泥田坊（どろたぼう）となった。演歌を歌う中高年の男は歌い終わると、物の怪村の村長である油すましとなった。浪曲を歌う老人は歌い終わると、支配人のぬらりひよんとなった。小節の効いた流行歌を歌った若い女は歌い終わって口裂け女となった。観衆の中で愛の姿を見かけて驚いた勇は、愛に近づいて、「愛！なんでここにいるんだ？」と聞いた。愛は、「兄上こそなんでここにいるの？私は黄泉の郷に行けば会えると聞いて母を探しにやってきた」と答えた。勇は、「物の怪退治できる鬼金棒が黄泉の郷にあると聞いて

てやってきた」と言った。死者たちが帰ってくる盆踊りの日を主催した杖を持つぬらりひょんは観衆の前で、「皆様！ お楽しみのところすいません！ そろそろ盆踊りも終わりに近づいてきました。どうぞ！ 残りの時間を余すことなく寛ぎください」と言った。山彦に、「支配人には気をつけなはれ」と聞いていたにも関わらずに勇は、「おい！ ぬらりひょん！ 物の怪退治できる鬼金棒はどこにあるんだ？」と尋ねた。ぬらりひょんは、「きさまは何者だ？ 物の怪支配人のわしに妖鬼棒（ようきぼう）はどこにあるかなどと烏澁（おこ）がましい不屈き者めが！」と言って勇に向けて杖で青龍混（せいりゅうこん）を放っていった。勇と愛は青い龍の形をした混合弾が色々な場所に放って行って、爆発していくなかを瞬間移動の術で他の場所へ移動していった勇が隙を見て現れたときにぬらりひょんの後ろに長い頭に火車剣（ひしゃけん）を投げて突き刺して火葉が爆破して動きを止めた。ぬらりひょんは倒れて立ち上がってきたら気を集中させた杖を勇と愛に向けて大きな青い龍の形をした青龍混を放っていった。勇は愛を守るようにして火炎昇竜波の改良型火炎昇龍波で大きな龍の形をした炎を放って突進させて青龍混と直撃した。威力の差で火炎混の勢いに負けて青龍混が弾かれて、ぬらりひょんは跳ね返されていった。ぬらりひょんは家来の物の怪たちに、「攻めろ！」と命じた。すでに人間と物の怪たちが逃げ惑った後で突然と現れた目くらの手の目は両手に目のある手のひらから目玉の放射線ビームを放って勇と愛が駆け足で逃げ惑って行って、舞台や樹林などを断ち切っていった。田んぼから現れた一つ目の泥田坊は、勇の両足を掴んで深い田んぼに引きずり込もうとすると、いきなり愛が泥田坊に向けて花ノ舞木遁の術で花枝の毒棘を放って泥田坊の上半身に突き刺して痺れさせた。体制を崩した手の目は、再び手のひらから目玉の放射線を放とうとしたときに、愛が手の目の右手の手のひらから見える目玉に棒手裏剣を投げて突き刺して痛々そうに右手を抑えながら左手の手のひらから放射線を発した。愛は武器を失って無防備な手の目に六尺棒を両手に持ち出した六尺棒で腹と顔を打って懲（こ）らしめた。愛は六尺棒を繋げて底なし沼から顔だけ覗かせた勇に棒の先を持たせて引っ張り出して勇を助けた。後ろからぬっぺぼうが愛を掴んで前に倒れて潰した。勇は持っていた六尺棒でぬっぺぼうの背なを叩いたが、弾力のある粘土のような体に跳ね返された。異形（いぎょう）の醜い獣から離れて迫ってきた一反木綿を勇は六尺棒で振り払ったが、顔に巻き付いて辺りが見えなくなった。勇の持つる翡翠と愛の持っている珠玉は、探知機のような役割を持つ銅鏡に映し出して場所を特定した。そこに現れた泰三は地雷土遁の術でぬっぺぼうの背なに地雷爆破させて蹴り退けてぬっぺぼうの下敷きとなった愛を助けた。勇は一反木綿に巻き付かれて窒息寸前で一反木綿の布の一部に爪鎖（つめくさり）を摘（つ）んで布を引っ搔いて一反木綿を剥ぎ取った。勇は辺りを舞う一反木綿に火炎火遁の術で火炎を放って、下半身を火破りして一反木綿は川に飛び込んだ。勇は醜い獣が勇に襲いかかって、押し倒されて喰い付こうとしたときに、雷神音遁の術で醜い獣を轟音を響かせて超音波で跳ね返して倒した。首を伸ばしたろくろ首は、立ち上がった愛に襲いかかって愛の首に巻きついて首を絞めつけた。勇はろくろ首に火炎火遁の術で火炎を放って愛の首から解き放して六尺棒でろくろ首の頭を叩いて懲らしめた。なまはげは泰造に包丁を振り回して襲いかかったが、泰三が薙刀で攻撃を防いで、鬼のお面を斬って割った。なまはげは醜い顔を曝（さら）け出したことで身を引いていった。ミイラ男は勇に襲いかかって首を締めつけようとして

きた。勇はミイラ男を解き払って六尺棒を振り回して差し伸べてる腕を省いて真っ向から頭を叩いてミイラ男が頭蓋骨にひび割れて倒れた。口裂け女は愛に、「ねぇ！ わたしきれい？」と聞いて口に巻いた布をはずして剃刀（カミソリ）で愛の口を裂こうとした。勇は口裂け女に火炎火遁の術で火炎を放ったが、愛の口から手を離して六尺棒で腹を突いて倒した。勇はぬらりひょんに、「それじゃあ妖鬼棒を出して貰おうか？」と聞いた。降参するぬらりひょんは、「仕方がない！ 出してやろうか！」と答えた。黄金の妖鬼棒を手渡した。勇は、「かたじけない！ これはいただくぞ！」と言った。ぬらりひょんは、「いいだろう！」と言った。勇は勇に負けた物の物の怪たちは怪たちを召喚の術に入れ込んで色違いの妖石となった。そこに極楽山の主である鬼灯を持った山鬼がやってきた。勇は、「さっき洞窟で会った山鬼じゃないか？ 極楽山の主だったのか！」と聞いた。山鬼は、「物の怪を祓う妖鬼棒を持ち出されては困る！ あれさえあれば極楽山に物の怪が来ても退治できる」と答えた。勇は、「なら俺が退治する」と言った。山鬼は、「そうはいかぬ！」と言って鬼灯を振り回してきた。勇は妖鬼棒で山鬼の攻撃を防いだが、背なを打たれて倒れ込んだ。山鬼は勇に鬼灯で真っ向から打とうとしたときに、愛が花ノ舞木遁の術で花枝の毒棘を放って山鬼に突き刺して痺れさせた。泰三は地雷土遁の術で山鬼の周辺に地雷爆破させたけど倒れなかった。立ち上がった勇は妖鬼棒で山鬼の腕を打って山鬼が鬼灯を落として腹を突いて頭を叩いて倒した。泰三は勇と愛と一緒に朱姫を探しに向かった。

天狗王の逆襲

油すまし村長は、「皆様いざござりましたが気になさらぬよう！ これで盆踊りを終わります」と言った。勇たちは三途の川の川辺を歩いていくと、小豆洗いは小豆を洗ってカワウソが土俵をとって河童は相撲をとる。物の怪市場にて、坊主で真ん中に目が一つだけの一つ目小僧が仏具を売って垢嘗（あかなめ）が垢を舐めた桶を売って一本足の唐傘小僧（からかさこぞう）が唐の国から来た傘を売って豆腐小僧（とうふこぞう）が普通の豆腐を売って河童が冷やし胡瓜を売った。物の怪市場から離れた場所で勇たちのところにも現れた蛇使いで肩に錦蛇をぶら下げた蛇骨婆（じゃこつばばあ）は、「よくも！ うちのぬらりひょんから妖鬼棒を奪ったな！」と言って勇に錦蛇を操って攻撃してきた。勇は錦蛇が襲ってきて、妖鬼棒で攻撃を防いでいたが、妖鬼棒を持った腕に巻き付いて締めつけて、妖鬼棒を落とした。せからしい蛇骨婆が妖鬼棒を奪おうとしたときに、勇は極殴打（きょくとうだ）の三要素を持った功で錦蛇を解き払った。勇は蛇骨婆が錦蛇を操らないように火炎噴火山の術で蛇骨婆の周辺を囲んだ火炎弾を発して蛇骨婆は倒れていった。勇は蛇骨婆が蛇に攻撃を命じて襲いかかる蛇がかぶりつこうとしたときに、蛇の頭を叩いて火炎風車舞の術でぐるぐる回る炎を放って錦蛇を火達磨にした。蛇骨婆は、「小癩（こしゃく）な！ そのうち天狗王様が黙ってないぞ！」と言ってくたばった。祭壇を作るまでのお祭り騒ぎの盆踊りも終わり、勇たちは聳（そび）える山の谷間を歩いて行って、極楽山のふもとを上ってきたところで三途の川に流れてくる水の溜まり場である蓮の咲いた池にたどり着いた。勇たちの目の前に沢山の大きな蓮の中の一つ開いた一輪の蓮の花びらから朱姫が現れた。朱姫は愛に、「よくきたね！ 元気していた？」と聞いた。愛は、「いつも元気している」と答えた。愛は朱姫に、「なんでそんなに早くにそっちいっちゃったの？」と聞いた。朱姫は、「仕方ないの病気になったので！」と答えた。朱姫は勇に、「頑張ってる？」と聞いた。勇は、「問題ないぐらい頑張っている！ こないだ忍びの任務を果たした」と答えた。朱姫は、「おまえは子供の頃からやんちゃ坊主だったから」と言った。朱姫は泰三に、「あの時はごめんなさい！」と聞いた。泰三は、「どういふこと？」と聞いた。朱姫は、「忍びと大奥の女中が結ばれることは掟破りでしかなかった！」と答えた。泰三は朱姫に、「それは仕方ないことだ！ うまくいかないことは承知の上だったんでな」と言った。朱姫は泰三たちに、「そろそろ行かないと！」と聞いた。愛は、「私は母上が父上と離婚したときに母上のところについて行って、姫路城の化粧檜で母上と一緒に愛姫として女中をしていたけど、私が忍びとしての魂があって耐えられなかったから辞めた。ずっといたかった！ でも会えて良かった！」と聞いた。朱姫は、「ありがとう！ いつでも会いにいらっしやい！」と言って向こうの世界に戻っていった。極楽山のふもとを下りて行って、三途の川に繋がる滝を横切って愛宕山に向

かった。しばらく峠の山道を歩いて上って下りていったところで騒めきが聞こえてきた。茂みの隙間から下のほうを覗いて見ると、魔界で夥（おびただ）しい物の怪たちの会合が開かれていた。獅子舞の髪型で片手に葉っぱのような団扇（うちわ）を持って、山伏（やまぶし）の格好をした物の怪総長と思える天狗王は、「われの一番弟子の烏天狗が未来で物の怪支配を忍びの者に抑えられて打ち止めされた！ その者は相生勇という伊賀の里の忍び！ 見つけ出したら八つ裂きにしてくれる」と言った。勇は、「怖いなあ！ 俺のことだ！ 誰が教えたんだ」と言って、背虫男のミラージュが天狗王のところに現れて天狗王に、「極楽山に相生勇らしき忍びどもが妖鬼棒を奪って盆踊りを荒らしていたらしいです」と伝えた。天狗王は、「その辺にまだいるかも知れなんぞ！ 皆の者よー！ 早く見つけ出せ！」と言った。勇は泰三に、「厄介者のミラージュじゃないか？ なんで未来からここに来てる？ やつが時空転送の門をくぐってきたのか？」と聞いた。泰三は、「恐らくそうだろうな！ やつが天狗王に密告したんだ！ 愛宕山は別に魔縁山（まえんざん）というらしい！ 危険区域に来てしまった！」と答えた。愛は勇に、「大丈夫！ 兄上をひとりにはしないよ！」と言った。勇は、「当分は寝れそうにない！ 早くここをずらかろう」と言った。瞬間移動の術で愛宕山のふもとに移動して口寄せの術で大鷹を呼んだ泰三と勇と愛は、大鷹に乗って空高く飛んでいった。泰三と勇と愛の乗った大鷹は伊賀の里に降り立った。泰三は勇と愛に、「雑魚（ごこ）物の怪のために武器は使えなかったが、野蛮な敵が現れそうだ！」と言って勇に鎖鎌を愛に卍剣を手渡した。勇は、「妖鬼棒はこう呪文を唱えれば小さくなるとぬらりひょんから聞いていた」と言って、妖鬼棒に向けて呪文を唱えると、黄金の鬼の飾り物となって手に取った。忍び屋敷に戻った勇は沙織に、「ようやく鬼に金棒で物の怪退治できる妖鬼棒という物を手にした！」と言って黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒を手に取った。それを見た沙織は、「すごい！ どうやって、手にしたの？ もしかしたら無理矢理に腕づくで奪った？」と聞いた。勇は、「そうだ！ ぬらりひょんという物の怪の支配人からだよ！」と答えた。勇は、「だけど棒術を鍛錬しないと扱えにくい！ 天仙人の貞明（さだあき）が棒術を教えてくれるとしたら、今は金剛山にこもって眠ってるはずだ！」と言った。沙織は、「まだ起こさないほうがいいかもね！ 未来でやっと目が覚めたようだったから」と言った。勇は、「さあ！ どうしようかな！」と言っていたら、愛がやってきて勇に、「どう涉に頼んで棍棒槍の槍術で特訓してみてわ？」と聞いた。勇は、「それいいね！」と答えた。愛は、「じゃあ決まりだ！」と言った。五右衛門風呂に使う薪（まき）を運ぶのに外にいた泰三のところに謎の忍者たちが現れて、「相生勇はどこにいるござろうか？」と尋ねた。泰三は、「今はいない」と答えた。謎の忍者の班長は、「嘘つけ！ この屋敷にいるだろう」と言って攻撃してきた。泰三は小屋にあった六尺棒を用いて、鉞鎌（なたがま）を両手に持った謎の忍者の班長に立ち向かったが、謎の忍者の班長の攻撃をかわすたびに六尺棒の先端が斬り裂かれていって、右腕をすり斬られた。泰三は忍び屋敷に薙刀を置いてきて、肝心な武器をなくして巨木突発の術で地面から巨木を出現させて、謎の忍者の班長を吹き飛ばした。謎の忍者の班長は鉞鎌を捨て大蟷螂（おおかまきり）となって泰三を襲いかかっていった。異変に気づいた勇は、囲炉裏をはずして愛に沙織を連行させて秘密の抜け穴に逃した。勇は苦無で一畳を搔き上げて盾にして忍び屋敷に侵入してくる忍者たちに手裏剣を投げて頭や胸に突き刺して、盾にした畳に忍刀を突き刺してきたら、毒を塗った手

裏剣で首や腹を突き刺していった、盾にした唐傘から抜いた隠し武器の仕込み刀で唐傘を破って腹を突き刺した。謎の忍者たちは蟻螂坂（かまきりざか）と戻って煙となって消えていった。薙刀を持って忍び屋敷から外へ出ていった勇は、泰三に薙刀を投げ渡して鎖鎌を取り出して一緒に大蟻螂に立ち向かった。怪異の大蟻螂の両腕の鎌を使った攻撃を避けるために泰三は、攻撃をかわしながらも薙刀で突いていった。勇は鎖鎌で鎌の先端にある六角鉛を振るって大蟻螂の右腕の鎌に鎖を巻き付けて右腕の鎌を抑えて鎌で攻撃した。大蟻螂は羽を広げて、飛び始めて勇を振り落そうとした。勇は大蟻螂が攻撃してくる左腕の鎌をかわして斬り落とした。泰三は勇を防ぎながらも正面から飛んでくる大蟻螂を真っ向斬りで斬り裂いた。起き上がる勇は、倒れた大蟻螂の巻きつけた右腕の鎌から鎖鎌を取りはずした。大蟻螂は煙となって消えていった。泰三は勇に、「これは天狗王の手下の物の怪に違いない」と言った。勇は、「早いとこ天狗王を抑えないとまがまがしい敵が現れるばかり！ 天狗王を抑えるには妖鬼棒で懲らしめるしかない！ だけど棒術の腕前が物足りなくて！ 俺は貞明のところにいくよ！」と言った。泰三は、「そうだな！ それは、そのほうが身のためだ！ ここは私に任しとけ！」と言った。勇は口寄せの術で大鷹を呼んで大鷹に乗って金剛山へ向かっていった。愛と沙織は秘密の抜け道を通り抜けると、伊賀の里にあるもう一つの井戸かと思わしてる井戸から上がって出てきた。金剛山にたどり着いた勇は、貞明の呼び名で、「おーい！ テイメイ！ 出てきてくれ！」と叫んで鎖鎌で切り取った大蟻螂の左腕の鎌をこもってる洞窟に投げ込んだ。すると異臭の臭いに目覚めて洞穴の中から現れた貞明は、「誰だ！ わしの眠りを妨げるやつは？」と尋ねた。勇は、「相生勇です！ 覚えておりますか？」と聞いた。貞明は、「よく覚えとるよ！ なんのようじゃ？」と答えた。勇は、「いまましい敵を倒すためこの妖鬼棒を手にした！ 天狗王がやってこようとしてる！ だから稽古してください！ お願いします！」と答えた。貞明は、「よし！ わかった！ それにしてもよくここにいることがわかった？」と聞いた。勇は、「ここにいることは知ってましたから！」と答えた。勇に棒を渡した貞明は棒を持って棒術の構えから教えることに上段構えと中段構えと下段構えから始めて一字構えと上一字構えと下一字構えと待気（まちき）構えと横構えと卍構えと大上段構えなど教えて攻撃の打ちと突きと防御の受けと払いと返しの技の稽古をした。稽古が終わった勇は貞明に、「稽古して貰えてありがとうございます」と言った。貞明は、「わしは当分の間で蓬莱山（ほうらいさん）の普光寺（ふこうじ）におる。いつでも稽古してやる。気が向いたときに訪ねなさい」と言った。甲賀の里で武術の特訓をしていた甲賀盗賊五人衆に土の中からモグラのように現れた謎の武装集団の長は涉に、「拙者は魔界から送り込まれたお尋ね者！ 勇はどこにいてござる？」と聞いた。涉は、「俺は知らない」と答えた。謎の武装集団の一人は、「嘘をつけ！ 勇と一緒に未来で三冠王たちに立ち向かったろう！ 腕づくで聞くしかない」と言った。謎の武装集団は甲賀盗賊五人衆に忍刀（しのびかたな）を使って攻撃していった。晃は両手に卍剣に似たサイを持って忍刀で斬り裂こうとする攻撃をかわして突いてきたときに、左手に持ったサイで防いで右手に持ったサイで打ってヘシ折って左手に持つサイで謎の武装集団のひとりの腹を刺して倒した。修は鎖で繋がった棒のヌンチャクを振り回して忍刀で斬り裂こうとする攻撃をかわして横斬りしようとしたときに、ヌンチャクで忍刀を取って謎の武装集団のひとりの顔を左に右に殴って頭を打って蹴り飛ばして倒した。湊は両手に棒に

取っ手が付いたほうのトンファーを持って忍刀で斬り裂こうとする攻撃をかわして真っ向斬りで斬り裂かれそうになってトンファーで腹を打って、顔を殴って蹴り飛ばして倒した。登は両手にクナイを持って忍刀で斬り裂こうとする攻撃をかわして横斬りしようとしたときにクナイで利き手の腕に突き刺して動きを止めてクナイで胸に突き刺して倒した。謎の武装集団は土蜘蛛となって溶けて消えていった。残る謎の武装集団の長は、鋭い爪が4本ある手甲鉤（てっこうかぎ）を片手に装具して渉に攻撃していった。渉は棍棒槍を使って手甲鉤で斬り裂こうとする攻撃をかわそうとしたが、棍棒槍を振り払って、背なをすり斬られた。背なの傷が流血している渉は決死に攻撃をかわして棍棒槍で謎の武装集団の班長の腹を突き刺した。痛みが疼（うず）く謎の忍者の長は大蜘蛛となって渉に糸を噴射して捕り巻いて鋭い脚で突き刺そうとしたときに、晃が両手に持ったサイで大蜘蛛の胴体と目を突き刺して登が大蜘蛛に乗ってクナイで大蜘蛛の八つの眼を突き刺して大蜘蛛が登を振り落とそうとしたら足搔（あが）き出した。渉が下半身に捕り巻かれてる糸を解いて、暴露山水遁の術で水爆の威力で大爆発させて大蜘蛛を吹き飛ばして倒した。

甲賀盗賊五人衆

涉は難波村の長堀川にかかる心齋橋を木橋から鉄橋にするために資金を国に寄付した。鉄橋はドイツから輸入されて1873年に架橋する予定で木橋の解体工事に甲賀盗賊五人衆が警備することになった。心齋橋筋通りの人々は危ない心齋橋を渡らずにわざと向こう側にある長堀橋から渡るように案内した。晃と修と湊と登は、涉の支持で心齋橋の両端に二人をつけて見回った。心齋橋筋通り側を見回る晃と修は雑談をし始めた。晃は修に、「涉さん聞いたんだが時空転送の門をくぐって未来にいったらしい」と言った。修は、「知っている！ それで未来からやってきた敵の一人が忍び込んできたといってた」と言った。晃は、「涉さん俺たちに武器を与えて、いつ敵が現れてもいいように護衛させられてるのかもしれない」と言って、修は、「時空転送の門はまだ難波村にあるようだが三次元装置という物は敵が持ち去ったらしい!」と言った。反対側を見回る湊と登も雑談をし始めた。湊は登に、「涉さん未来にいたときに江戸城跡近くに皇居があって、これから出来る路面電車より大きい地下鉄という乗り物が出来るが半蔵門線というらしい」と言って、登は、「半蔵と聞くと、服部半蔵を思い浮かぶでごあす!」と言った。湊は、「それだよ！ 服部半蔵は徳川家康の下で江戸城の門弟の番人をしてたんだって!」と言った。登は、「そういえばおいらも心齋橋の番人でごあす！ 盗っ人以外の任務でごあす」と言った。登のところに来た涉は、「こないだ攻めてきた謎の忍者たちは忍術を使って蜘蛛に化けた訳じゃない物の怪だった!」と言って、登は、「やっぱ物の怪なんているんだ！ 未来にいったときも物の怪と戦ったのでごあすか?」と聞いた。涉は、「そうだ！ 三冠王（さんかんのう）という物の怪が未来へ向かって行って、魔界を広めようとした」と答えた。涉は、「あんまり雑談ばかりせずに仕事に没頭してくれ！ 俺は心齋橋筋通り側を見てくるよ!」と言って離れた。難波村のお食事処でざるそばとむすびを食べて、心齋橋筋通りから心齋橋までやってきた。修と晃は勇の通行を止めて、「解体工事のためこれより心齋橋を渡れません！ 長堀橋を利用ください」と言った。勇は、「わかった！ あっちからだ」と言った。涉は心齋橋の反対側から歩いてきたときに勇を見て、「おい！ 勇じゃないか?」と問いかけた。勇は、「やぁ！ 久しぶり!」答えた。涉は、「あれから何も起きてないか?」と聞いた。勇は、「伊賀の里に現れた謎の忍者たちのリーダーが大蟷螂となって襲ってきた。恐らく魔界の天狗王の手下だ！ 今は伊賀の里に戻れない。天狗王は俺に烏天狗をやられたとっていたが、やつは俺を狙ってる!」と答えた。涉は、「甲賀の里に謎の武装集団が現れると、リーダーは大蜘蛛となって襲ってきた!」と言った。勇は、「それは悪かったなあ！ なぜ心齋橋の解体工事で警備してるんだ?」と聞いた。涉は、「国に資金を支援して心齋橋を鉄橋に建て直ちに協力しようと警備を雇わずに警備もやってるんだ!」と答えた。涉は、「謎の忍者たちが勇はどこにいるかと尋ねてな

にも関係のない俺は背なに傷を受けた」と言った。勇は、「それはすまなかった！ だけど未来の大和で烏天狗の陰謀を阻止しなければならなかったのは解ってるはずだ！」と言った。渉は、「だが埋蔵金を奪うだけであって俺に関係ないことだったよ！」と言って勇に棍棒槍の八重歯を向けた。勇は黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒を手を取った。勇と渉は心齋橋の真ん中へ走って行って、決闘を始めた。渉は勇に棍棒槍を突いてきたが、勇は中段構えで払って、大上段構えで真っ向に渉の頭を打とうとしたが、渉は上一字構えで防いで横構えで勇の脇腹を打とうとしたが、勇は飛んで棍棒槍を振り払った。勇は上段構えと下段構えで攻めて、渉は上段構えと下段構えで払い返したが、勇は下一字構えで防いで、卍構えで渉の腹を突いて、顔を打った。堪忍した渉は、「すまない！ 俺が悪かった！ 烏天狗のしたことは俺も許せない！ やつはなんとしても倒さなければならなかった！」と言った。妖鬼棒に呪文を唱えて黄金の鬼の飾り物にした勇は、「大和の未来を守るために協力してくれたことはありがとう」と言った。渉に、「この先まだ悪霊祓いは必要だ！」と言って鎖鎌を渡した。いきなりものすごい速さで羽を広げた天狗王が心齋橋を目がけて飛んできたら作業をしてる大工たちが逃げ惑う心齋橋に向けて枳棒の先端から稲妻ビームで放って爆撃してそのまま突進して体当たりで心齋橋に激突して勇と渉のいる緩んだ心齋橋が崩れ落ちた。瓦礫（がれき）の下敷きとなった勇は極投打の三要素の功で瓦礫を解き払って渉を瓦礫の下敷きから救い出した。勇は渉に、「大丈夫か？」と聞いた。渉は、「俺は大丈夫だ！ それよりあっちから天狗王がやってくるぞ！」と答えた。空神の天狗王はまたものすごい勢いで心齋橋の瓦礫を目がけて飛んできて、勇を掴んで上空に飛んでいった。天狗王は、「やっと見つけたぞ！ おのれが伊賀の忍びの勇だな？ よくも一番弟子の烏天狗をやってくれた」と聞いた。勇は、「烏天狗は未来の日本を魔界に支配しようとしたからだ！ なんとしてでも阻止しなければならなかった！」と答えた。天狗王は、「そのことはわれが烏天狗に指示したことだ！ 余計なことをしてくれた」と言って、勇を掴んだまま地上まで回転しながら急降下した。勇は地面に突き落とされる前に遠心力の回転するなかで、黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて、勢いよく妖鬼棒を手を取ったときに、妖鬼棒の先が天狗王の腹を突いて天狗王から解き離れた。勇は地上に落下していくまで口寄せの術で大鷹を呼んでもものすごい速さで飛んできた大鷹の背なに乗って助けられた。勇の乗った大鷹に向かって前方から勢いつけて飛んできた天狗王は枳棒（しゃくぼう）を振るって勇を突き落とそうとした。勇は妖鬼棒で枳棒を振り払った。天狗王は旋回して勢いつけた勇が乗った大鷹はものすごい速さで追っていった。勇を乗せてる大鷹は、低空飛行を続けて天狗王を振り払おうと金剛山の険しい森林の中へ飛んでいった。森林を抜けた川辺で天狗王は、大鷹に乗った勇に枳棒で雷（いかづち）を放って大鷹から勇を振り落とした。倒れた勇のところに降り立った天狗王はうつ伏せの勇が意識あるか枳棒で突いて確かめた。勇は天狗王の枳棒を振り払ってなんとか立ち上がった。天狗王は勇に、「今度こそ袋の鼠（ねずみ）にしてくれる」と言って枳棒を横構えで振り回して勇の頭を打とうとしたが、勇は妖鬼棒を待気構えで防いだ。勇は中段構えで天狗王の腹を突こうとしたが、天狗王に下段構えで払われて上段構えで勇の顔を打った。勇は上段構えで右に左に天狗王の顔を打とうとしたが、天狗王は攻撃を上段構えで右からも左からも防いだ。勇は大上段構えで真っ向から天狗王の頭を打とうとしたが、天狗王に上一字構えで防がれた勇を蹴り飛ばした。天狗

王は転げた勇に最後のトドメを刺そうと、積棒で雷を放とうとしたときに、貞明が現れて仙術で衝撃波を放って天狗王を跳ね飛ばして、その隙に小雲（こぐも）を呼び出して勇を連れて小雲の上に乗って蓬莱山の普光寺へ向かっていった。勇は天仙人に、「なぜ金剛山にいたのですか？」と聞いた。貞明は、「うっかりと忘れ物をしておったんでな！」と答えた。勇は、「助かりました。ありがとうございます！」と言った。貞明は、「天狗王は手強い！ お寺で3ヶ月ほど指南の技である棒術の稽古してやる！」と言った。勇は、「お願いします！」と言った。心齋橋の解体工事は天狗王が破壊したことによって瓦礫の撤去された。修と晃と登と湊の4人は、天狗王に心齋橋を破壊された後ですぐに渉のところに駆けよって渉を支えながら心齋橋筋通りを歩いて宿場へ向かっていった。

魔縁山で天狗王と決着

貞明と勇の乗った小雲は普光寺の石段の下に降り立った。貞明と勇は石段を上って凄まじい顔をした二つの仁王像がいる仁王門をくぐって六地藏を通り抜けていくと、寺に着いた。勇は寺に住み込んで3ヶ月間の修行をすることになって、毎日のように精神的に強くなるため、滝に打たれて食事する前に座禅を組んだ。朝は早くから棒術の形と構えと打ち込みをして、仕掛けられた罠から藁人形（わらにんぎょう）が現れたり隠れたりする絡繰り館で藪から棒に迫りくる藁人形と戦った。老師の貞明は勇に片手で杖を持って杖術で棒術を教えた。勇は貞明から必殺の仁王構えを教わった。心齋橋筋通りにて、日本橋筋通りの長町の宿場町にたどり着いた渉を抱えた晃と修と湊と登は渉を宿へ運んで畳の寝間に布団を敷いて寝かした。晃と修と湊と登の四人衆はしばらく渉の看病したが、夜になって買い出しにいくと宿から出て道頓堀へ向かっていった。四人衆はなぜか梓（あずさ）という女郎（じょろう）の声に誘われて遊郭邸に入ってしまった。三味線を奏でる演芸を踊る女郎を見ながらとっくりでお猪口（ちょこ）に注ぐ酒を呑んだ。酔い潰れた晃と修と湊と登は、女郎たちに誘惑されていった。疚（やま）しい魔物の女郎たちは晃と修と湊と登たちに如何（いかが）わしく迫り出して、若々しい肌を持つ純粋な四人衆は、その身を委（ゆだ）ねた。女郎たちは鋭い牙を剥き出して四人衆の首を咬みついて麻酔液を流し混んだ。四人衆はそのまま横になって気がつく、遊郭邸の大広間で蜘蛛の糸に巻かれて天井にぶら下げられていた。渉は平成時代で1873年に心齋橋の木橋が完成されて1909年に心齋橋の石橋が完成されて心齋橋の木橋は鶴見緑地公園に移動して平成時代では石橋の面影を手すり部分と灯籠を残して忙（せわ）しい道路になっていたと思っていると、夜遅くなって一向に帰ってこない四人衆が気になって布団から起きて、宿から外に出て道頓堀へ向かっていった。渉は遊郭邸の近くに来て、怪しいと思った女郎の太夫（たゆう）である梓に導かれて遊郭邸に入ってしまった。渉は演芸場で女郎にお猪口を注がれた酒を一口で呑んだ後で、「厠（かわや）を貸してくれんか？」と言って席を離れた。淫らな女郎たちの目を盗んで大広間に出向いた渉は天井にぶら下がっている四人衆を見つけた。渉は四人衆が天井に吊るされてる糸を棍棒槍で切り外して、四人衆を畳の間に落とした。渉は四人衆が巻かれた糸を鎖鎌で裂いて解こうとした。そのとき現れた梓は渉に、「そこで何をしてる？」と聞いてきた。渉は、「こいつら俺の弟子だ！ これはなんのつもりだ？」と答えた。梓は、「そうなのかい！ それじゃあんたも同じようにしてあげるわ！」と言って、女郎蜘蛛（じょろうぐも）如く絡新婦（じょろうぐも）となって、渉に襲いかかっていった。渉は鎖鎌の先端にある鎖の六角鉛を振るって威嚇して、絡新婦の攻撃を避けていった。大広間に芸者と女郎たちがやってくると土蜘蛛となって、長い6本足の先に合体していった。襲いかかる土蜘蛛の

6本足に涉は鎖鎌の先端にある六角鉛を振るって、巻き付けてきた絡新婦の右側の足2本を縛って鎖鎌の鎌で斬り裂こうとしたが、残る4本足の先にいる土蜘蛛に糸を巻かれて身動く気ができなくなって、絡新婦が涉の首筋に咬みついて麻酔液を流し混んだ。寝ていた涉と四人衆は、麻酔が解けて眠りから覚めると魔縁山側の深い溪谷（けいこく）の橋の下に蜘蛛の巣を張られて、そこに貼り付けられていた。涉のところに這い降りてきたいやらしい絡新婦は、「あたいの可愛い獲物たち！ いい美味しい」と言って涉の顔を舐めて、「いい男だ！ あんたが勇という男かい？」と尋ねた。涉は、「やめろ！ 息臭えぞ！ 不潔な悪女！ 俺は甲賀盗賊団の新崎涉だ！ 勇は流派の違う忍びだ！ 知らない」と答えた。絡新婦は、「じゃあなぜ勇を知っている？」と聞いた。涉は、「よく争っていたからな！」と答えた。涉は、「てめいらも天狗王の手下なのかよ？」と言って、何も言わずに絡新婦は蜘蛛の巣から離れた場所へ這い上っていった。晃は、「このままじゃあ格好の餌食だな！」と言った。湊は、「危険に近づけば巻き込まれるというやつ！」と言った。修は、「用が済んだら食べられるのか？」と聞いた。登は、「おいら助かるでごあすか？ 高いところは苦手でごあす！」と聞いた。涉は、「ただひたすら誰かの助けを待つしかない」と答えた。絡新婦は勇を誘い出すためだけに、五人衆を生け捕りにしていた。あれから5日も経った五人衆は、食べ物も水も口にしてないまま弱り果て絶望の危機に見舞われた。涉は危機を乗り越えようとして気づいた勇の大鷹を口寄せの術で大鷹を呼びよせた。飛んできた大鷹は吊り橋に掴まって、すぐに状況を気づいた勇のいる蓬莱山の普光寺へ向かっていった。勇は流れる滝の上にある岩場で棒を振り回して形と構えの稽古していた。そのときに大鷹が空から飛んでくると勇のところに降り立った。勇は黒い装束を装って、呼んでもない大鷹がやってくる時は非常なときだけだと感じて、「テイメイ！ 申し訳ない」と叫んで大鷹に乗って、こっそり修行場から離れて大鷹のいく方向へ向かっていった。魔縁山にたどり着いた勇は、大鷹に乗って深い溪谷の断崖の間に吊り橋があるのが見えた。そして吊り橋に近づいていくと、吊り橋の橋の真下に張られた巨大な蜘蛛の巣に涉と四人衆が貼りつけられて、すでに弱り果てた可哀想な姿を見た勇が大鷹から飛び降りて吊り橋の上に降り立って吊り橋の真下にいる五人衆を貼りつけられてる蜘蛛の巣からどうにか救い出そうと思ったときに吊り橋のほうから得体の知れない蜘蛛女の絡新婦がやってきた。四つんばいの絡新婦は勇に、「あんたが勇という男なのかい？」と聞いた。勇は、「そうだ！ 蜘蛛の巣に張られた五人衆に関係ないことだ！ 解き放してやってくれないか？」と答えた。絡新婦は、「そうはいかないね！ その前におまえさんを天狗王に引き渡さないとならないの」と言って勇に襲いかかっていった。勇は黄金の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒にして中段構えで妖鬼棒を迫ってくる絡新婦を突いていった。絡新婦の6本足の先にいる土蜘蛛が糸を放って、勇を妖鬼棒ごと取り巻こうとした。勇は紅色の妖石に助けを願って投げた妖石から口裂け女が現れた。口裂け女は美濃国の岐阜藩の若娘が恋人に会うために、夜の山道の峠を歩いて渡るのに身を守る知恵を思いついて白い鉢巻に白い着物を着て口に人参を啜（くわ）えて両手に鎌を持って口裂け女が出ると噂された。この口裂け女は格好は同じ様なんだが、縫い合わせができずに手術を失敗して、口を裂けたままの状態から破滅して口に布を巻いて隠した。口裂け女は勇に両手に持った鎌で土蜘蛛が放った糸を切り外していった。鎌で攻めてくる口裂け女を絡新婦は掴んで口裂け女の口に巻いた布をはずし取って裂かれた口を大きく

開いて麻酔液を流し混んだ。眠り込んだ口裂け女は変化して狐が化けた姿であった。勇は黄土色の妖石に助けを願って投げた妖石から白布が現れた。勇が土蜘蛛の糸が放そうとしたときに、白布は一反木綿と醜い獣に分かれて醜い獣は絡新婦を後ろから抑えて一反木綿は絡新婦の顔を覆い被って、勇は絡新婦の6本足の真っ先にいる下劣な土蜘蛛を上段構えで叩き落として倒した。無防備になった下拙（げせつ）な絡新婦は、「よくもうちの子たちを」と言った。勇は妖鬼棒で中段構えで絡新婦の腹を突いて、横腹を打って、上段構えで顔を打って、大上段構えで構えると、一反木綿と醜い獣は絡新婦から離れて合体した白布に戻って妖鬼棒を大きく振るって頭を叩いた。絡新婦は頭から血を流して吊り橋の下にある地獄谷の川に落ちていった。白布は黄土色の妖石となって勇に拾われた。勇は口寄せの術で大鷹を呼んで大鷹に乗って、蜘蛛の巣に張られている五人衆のところに行って、大鷹が一人ずつ爪で掴んで鉤縄（かぎなわ）を振るって周りの糸を破って断崖の丘の上に運んでいった。五人衆を滅亡の危機を救う勇は涉に、「大丈夫か？」と聞いた。涉は、「大丈夫な訳がないだろ！でもお陰で命拾いした」と答えた。勇は、「このぶんは道頓堀で食事を奢（おご）るから勘弁して！」と言った。涉は、「勇よ！向こうからやってくるぞ！」と言った。勇はものすごい勢いで飛んでくる天狗王に極めた仁王構えで妖鬼棒を握りしめると、突進してくる天狗王を妖鬼棒を振るってふっ飛ばした。勇は断崖の丘に倒れ込んだ天狗王の息の目があるか確かめた。勇は、「俺の勝ちだな！」と言った。咄嗟に立ち上がった天狗王は、「そんな小道具で、おのれを倒せると思ったのか！」と言って、枳棒と妖鬼棒の競り合いが続いて、急所伏虎（きゅうしよふっこ）構えで急所の股間を打ったが、難敵の天狗王には効かなかった。試練を乗り越えずに力不足だった勇は天狗王に枳棒で頭を叩かれて、気を失って捕らわれの身となった。魔縁山にて、黄泉の郷を乱（みだ）した罪と烏天狗などを射止めた罰として、物の怪総長の天狗王が裁判官の物の怪裁判によって、兆候が的中して処刑の身となった勇は十字架に架けられた。勇は六道輪廻からはずれた天狗道（魔界）に堕ちた物の怪たちがいる処刑場で覚悟をするまでとなった。天狗王は、「おまえたち見とけ！愚かな人間が血祭りに上げられるとこそ！」と言って、背虫男に、「やれ！」と命じられた背虫男が刃が太い槍で突こうとしたときに勇は、「やめろー！ミラージュ！正気に戻れ！」と言った。黒い装束を装った坊主頭の泰三と朱色の装束を装った髪を束ねた赤い仮面の愛が現れた。愛は、「ちょっと待ってよ！悪いのはそっちでしょう！」と言った。泰三は、「天罰を下されるのはおまえたちのほうだぞ！」と言った。天狗の鼻が高鳴る天狗王は、「おのれ！よくもわれを侮辱（ぶじょく）してくれたな！」と言って鬼化して物の怪たちに、「かかれ！」と命じた。襲いかかってくる物の怪たちを泰三は薙刀で愛は卍剣で斬り裂いていった。処刑されかけた勇は緑の翡翠に祈りを込めて、グリーンドラゴンを呼びよせた。黒雲に閉ざされた眩しい光が見えたときに、新生グリーンドラゴン（緑の龍）が現れた。グリーンドラゴンは物の怪たちに火炎峰を放っていった。物の怪たちに追込まれた愛は、赤い珠玉に祈りを込めて不死鳥で鳳凰の火の鳥を呼びよせた。火の鳥は火炎砲を放っていった。泰三は木を十字形に組んだ物に縄で両手足を縛られた懺悔（ざんげ）な勇を薙刀で縄を切り外して解放した。勇は奪われた妖鬼棒を探しに向かうとしたときに、背虫男が妖鬼棒を持ってること気がつかされた。勇は背虫男に、「おい！そのミラージュよ！その黄金の妖鬼棒を返してもらおうか？」と聞いた。背虫

男は、「太郎坊様から誰にも渡してはならんと命じられたんだ！」と答えた。勇は、「なんの目的で未来からやってきた？」と聞いた。背虫男は、「私は孤児で育てられた身より
ない者！ ブラジルから日本に出稼ぎにきて、烏天狗様に会って一生を共にすることにな
ってからは烏天狗様に天狗道に導かれて自ら物の怪となることに決めたのだ！」と答
えた。勇は、「そうか！ それでも妖鬼棒を腕ずくで奪い取ってやる！」と言った。背虫男
は、「妖鬼棒を渡したら魔界の物の怪が減びるかも知れない！」と言った。勇は火炎烈火
の術でものすごい勢いの炎を放ったが、妖鬼棒を手放した背虫男は傀儡（くぐつ）人形
を操り出して、それを盾にした傀儡人形の口から油を巻いて炎を跳ね返した。勇は跳ね
返された炎が黒装束に燃え移って火炎容体の術で体から炎を放出して体から黒装束に炎
を慣らして火炎旋風の術でものすごい勢いの炎の竜巻を起こして傀儡人形と背虫男を巻
き込んでいった。勇は火炎容体の術を解くと、傀儡人形が燃え尽きて背虫男が合金の肌
と変化して身を助けた。勇はすぐに地面に落ちている妖鬼棒を取って上段構えで頭を右
からも左からも打って、横構えで腹を左からも右からも打って、浮かかっている左足から
下一字構えで妖鬼棒を背虫男の後ろ足にかけて引き上げて後ろへ倒して一字構えで腹を
3回打った。勇は背虫男に、「おい！ 背虫男！ 三次元装置はどこにやったんだ？」と聞
いた。背虫男は、「知らない！」と答えた。勇は、「早く言わねえとあそこ潰れるぞ！」と
言って妖鬼棒で背虫男の腹を打っていった。背虫男は、「わかった！ わかった！ 愛宕神
社の井戸に投げたんだ！」と言って堪忍した。勇の火炎旋風の術で炎が草木に乗り移っ
て山火事になった。勇は物の怪たちに向かって行って、魔縁山で大暴れした。グリーン
ドラゴンは天狗王に向けて火炎峰を放っていったが、天狗王は葉っぱのような団扇を天
に向けて振ると、急に大雨が降り出して嵐の中で雷を起こしていった。攻撃を妨げら
れたグリーンドラゴンは天空の彼方へ戻っていった。火の鳥も姿を消していった。暴風
雨は止むと、山火事が消化されて食い止めた。勇は泰三と愛に物の怪たちの攻撃を任し
て天狗王のところに行って、妖鬼棒で立ち向かった。勇は上段構えと下段構えで打っ
て攻撃していくと、天狗王は枳棒を使っては待気構えで防御されていった。鬼化した天狗
王は、一段と強さを増していった。勇は中段構えで突いて攻撃を放って最後の一撃を食
らわそうになったときに小雲に乗ってやってきた貞明は天狗王に仙術で衝撃波を放って
天狗王の攻撃を抑えた。貞明は、「毘沙門天（びしゃもんてん）よ！ こやつは良い人
間なんじゃ！ 悪いんは物の怪なんじゃよ！」と言った。天狗王は、「われは人間同士
で争いごとをする激動の時代を食い止めるために未来で魔界を開こうとしたこと何が悪
い！」と言った。福祿寿（ふくろくじゅ）の貞明は勇に、「天狗王の鼻を叩くんじゃ！」
と言った。勇は枳棒を放つ天狗王の弱点の天狗の鼻を素早く何度も叩いて天狗王を懲ら
しめた。女七福神の琵琶を持つ弁財天（べんざいてん）が現れた。弁財天は天狗王に、
「もう辞めなさい！ 未来で動乱を防ぐように毘沙門天に戻って人々の憎悪を退治して
いくのです」と言った。悪に目覚めてから天狗道に落ちた毘沙門天は、「参った！ われが悪
かった！ そうしましょう」と言った。天狗王のところに来てきた背虫男は、「太郎坊
様！ 私の役はどうなるのですか？ どうすれば合金の肌からもとの肌に戻るのですか？」
と聞いた。毘沙門天は、「うるさい黙れ！ おまえは破門だ！」と答えた。毘沙門天は枳棒
で雷を放って合金の肌の背虫男が感電して倒れてミラージュに戻った。毘沙門天は右手
に武器を持って左手に宝塔を持った武将の姿をした毘沙門天となって、左手に鯛を抱え

て右手に釣竿を持った恵比寿天（えびすてん）と大きな袋を背負って打ち出小槌（こづち）を持って頭巾を被ってる大黒天（だいこくてん）と鹿を連れて左手に桃を持って右手に巻物を括りつけた杖を持った福祿寿と同じ長寿の老人（じゅろうじん）と布袋尊（ぼていそん）が現れて七福神がすべて揃った。物の怪たちの戦いを食い止めて極楽山に居座る外道の物の怪たちのところへ移っていった。毘沙門天が支配していた愛宕山は黒雲が解いて晴天青空が広がった。貞明は勇に、「戯け者め！ もっと真剣に取り組んじゃ！ 鍛錬がなっとらんぞ！」と叱った。勇は、「大鷹が何かの助けを求めてやってきたので仕方ありませんでした」と言った。勇は泰三と愛に、「断崖の丘で涉たち五人衆が衰弱しそうなんで山水の入った竹の水筒を持って行ってほしい」と言った。泰三は口寄せ術で大鷹を呼んで愛と一緒に大鷹に乗って、断崖の丘へ向かっていった。勇は貞明に、「七福神だったとは知らなかった！ あとで未来からやってきた背虫男のミラージュという者が愛宕神社の井戸に三次元装置を落とした。そこへいきましょー！」と言った。勇は貞明と雲に乗って愛宕神社へ向かっていった。勇は小雲を動かす貞明に、「もう天狗王の正体を知ってたんですか？ だから天狗の鼻に弱点があることも知ってたんですか？」と聞いた。貞明は、「そりゃまあ同じ七福神じゃからのう！ なぜ邪道にいつてもうたんかの！」と答えた。勇は、「なんで天狗王の鼻が弱点だと教えてくれなかったんですか？」と聞いた。貞明は、「それは自分で致命傷を見つけさせるためじゃよ！」と答えた。小雲に乗った貞明と勇は愛宕神社にたどり着いた。勇と貞明は愛宕神社の井戸のあるところに行って井戸を覗けば三次元装置が水に浸かっていた。井戸から髪を伸ばした骸骨のひよろ長い狂骨（きょうこつ）が三次元装置を持って現れた。狂骨は勇に、「いったい誰なんだよ！ この重々しい物を投げよったの？」と聞いた。勇は、「俺は知らない」と答えた。狂骨は三次元装置を投げ捨てて井戸に戻っていった。七福神は鶴と亀を連れた長い頭で長い顎髭の福祿寿の貞明を除いて、それぞれ神として宿命を果たしに散らばっていった。勇は貞明に、「三次元装置は放っておいて！ 涉たちが断崖の丘で野垂れ死にしそうなので先を急ぎましょー！」と言って勇は貞明と雲に乗って断崖の丘へ向かっていった。小雲に乗った貞明と勇は断崖の丘にたどり着いた。泰三と愛は横になった五人衆に竹で出来た水筒で山水を飲ませていった。五人衆は少しづつ回復していった。貞明は小雲を掻き集めて大きく膨らまして出来た大雲に五人衆を乗せて勇の指示どおり道頓堀へ向かっていった。勇は泰三と愛と一緒に大鷹に乗って道頓堀へ向かっていった。道頓堀にたどり着いた晃と修と湊と登たちが勇と泰三に肩を組んで道頓堀の食事処へ向かって行って、勇の奢りで釜めしを大量に食らった。貞明は勇に、「勇よー！ また会おうぞ！」と言って小雲に乗って黄金山の洞穴に戻った。勇は呪文を唱えて妖鬼棒を黄金の鬼の飾り物に戻した。なにはともあれ貞明のお陰で天狗王の策略を抑えることができた。

奠都の東京へ向かう

ミラージュは天狗王に見捨てられて行き場を失って、井戸に落とした三次元装置のある愛宕神社までへ向かっていった。愛宕神社にたどり着いたミラージュは井戸のところにいくと、井戸の外に三次元装置が置いてあることに驚いた。ミラージュは水の入った三次元装置を横にして水を抜くと、大八車（だいはちぐるま）に乗せて、難波村にある時空転送の門のところまで三次元装置を乗せた大八車をたどたどしく押していった。難波村の空き地にたどり着いたミラージュは、大八車から三次元装置を降ろして時空転送の門を覆った大きな布を解き払った。ミラージュは時空転送の門から繋がる配線を三次元装置に繋いで時空転送の門に太陽エネルギーを浴びさせて作動させると、年号設定を烏天狗に教わっていたとおりに三次元装置に2015年3月31日に設定して時空転送の門をくぐって、通過していった。ミラージュは水に浸っていた原因で三次元装置が故障してしまって、日本じゃない違う国に移動した。恐らくそこは氷河のアラスカであった。ミラージュはまた時空転送の門をくぐり抜けようとしたときにオゾン層の影響で三次元装置の動きが停止していることに気がついた。ミラージュは真冬で2ヶ月間も太陽の昇らない夜が続く摂氏マイナス45度の極夜の環境に耐えれずに、その場で倒れ込んだ。うつ伏せに倒れたミラージュのところにヒグマが近づいてきて、ミラージュに生きてるか探った。そこにやってきた救助隊は猟銃をヒグマに向けて威嚇射撃した。ヒグマが遠くへ逃げていくと、救助隊がミラージュを担架に乗せてアラスカ総合病院に送った。ミラージュは息を取り戻してブラジルの故郷に帰る資金が貯まるまで、しばらくアラスカで下働きして生きることを決めた。勇は難波村の空き地に大きな布で隠した時空転送の門の様子を見に来たが跡形もなくなっていることに気づいた。勇は愛宕神社の井戸の近くに置いた三次元装置を見に行った。難波村から走って愛宕神社にたどり着いた勇は、井戸近くに置いた三次元装置がないことに気づいた。呆然とした勇はミラージュが時空転送の門と三次元装置をどこかへ持ち去ったとしか思えなかった。勇は近江屋事件の犯人は誰なのかを知りたくなって、龍馬を暗殺した見廻班はええじゃないかのお祭り騒ぎの行列に紛れ込んで姿を消した犯人を見つけ出すために京都河原町へ向かっていった。警備隊の見廻班は武力でくる者を斬ったりしないと考えた勇は、長州藩か薩摩藩か土佐藩か紀州藩か新撰組の中にいる誰かでないかと思った。勇は近江屋の前まで来たが犯人はどのような人物像であったか見えなかった。伊賀の里の忍び屋敷に帰ってきた勇は沙織に、「今から東京へ向かう！ ついてきて」と聞いた。沙織は、「もちろんついていよ！」と答えた。そこにやってきた愛は勇に、「兄上！ どうとう東京に行くの？」と聞いた。勇は、「そうだ！ 明日の朝に旅立とうかと思うんだ！」と答えた。沙織は勇に、「え！ まだ心の準備できてない！ 少し早い！」と言った。勇は沙織に、「行動は早いほうがいい

いからなあ！」と言って一夜を過ごした。旅立ち前の翌朝から京都で競走馬の早馬（はやうま）を入手していた勇は、早馬に沙織を前にして乗って紐を握って出発の準備ができた。勇は愛に、「魔縁山で絶対絶命の危機を救ってくれてありがとう！ けどなんで俺がいる場所わかったんだ？」と聞いた。愛は、「兄上が持っている緑の翡翠が危うくなると赤い珠玉が光り出して危険を知らしてくる」と答えた。そこに現れた泰三は勇に、「そうだ！ それで私が持っている探知機のような銅鏡に映し出して場所を特定したということだ」と言った。勇は、「ちょうど、それは助かった！ それじゃあ出発するよ！」と言った。愛は、「関所のところまでついていくよ！」と言った。泰三は、「東京に着いてから、すぐに心里ついて帰ってくるんじゃないぞ！」と言った。勇は泰三は、「わかっている！ たっしやで！」と言って勇と沙織を乗せて蹄の足音をたてる早馬を愛が引っ張りながら関所まで進んでいった。関所にたどり着いた勇と沙織は、早馬から降りて通行手形を関所の番人に見せた。関所の番人は勇に、「待てっ！ ここは通さん！ 金めの物を差し出してからだ！」と言って関所の番人は輸入道となった。空中を舞う火車に顔のある輸入道は勇に火炎玉を放って攻撃していった。勇は黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて、妖鬼棒にして手に取って輸入道が放った火炎玉を妖鬼棒で払っていった。輸入道は、「このひよっこ青二才！ トドメを刺してやる！」と言って勇に火炎を集めてまっすぐに放った。勇は火炎風車舞の術でぐるぐる回る炎を放って火炎がぶつかりあった火炎の勢いに負けた輸入道を火達磨にした。火達磨となった輸入道は回転しながら勇を轢き殺そうとして移動してきた。勇は轢き殺そうとしてやってくる輸入道をうまく避けながらも勢いをよくまっすぐ向かってきたときに仁王構えで妖鬼棒を振るって、輸入道の顔を顔面打ちして倒した。勇は輸入道が燃え尽きてきて、辺りに落ちていた通行手形を拾った。勇は早馬に沙織を乗せてから乗って愛に、「じゃあ！ いくぞ！」と言った。愛は、「遠く離れるけど頑張る！」と言った。愛は沙織に、「兄上をよろしくお願いします」と言った。勇は愛に、「たっしやでね！」と言って早馬を走らせていった。1870年に関所は廃止となった。伊賀街道を走って行って、伊賀国の伊賀藩を出て、摂津の国（大阪）から京都に着いた。勇は東海道と日光街道と奥州街道と中山道と甲州街道の五街道で駿河と遠江の境のために幕府の防衛政策で東海道の大手川と安倍川に橋がなく川を渡るには川越人足（かわごしじんそく）に肩車で担がれるか川越人足たちが担いだ連台に乗っていくしかなかったので中山道を日本橋から馬車の轍（わだち）を沿って行って、東京にたどり着くまで4、5日はかかって、どんな馬も夜は休むからかなりしんどい過酷な道を進んでいった。勇と沙織は疲れたり腹が減ってくるたびに、早馬から降りて出茶屋と宿場の茶店でむすびと団子とお茶と甘酒などを食べて飲んだ。勇は大鷹に乗って東京へ向かっていたら、大鷹では持たないだろうと考えて早馬にしたことは正解だったと思えた。勇は早馬に牧草の餌を与えて走らせたりと歩かしたりと果てしなく続く道を進んでいった。早馬に乗った勇と沙織は奠都（てんと）の東京が近づいてくると、甲州街道と合流して上尾宿で温泉に浸かって食べて飲んでゆっくりと休み69カ所の宿場町を経て東京にたどり着いた。早馬の頑張りかと思ったより早くたどり着くことができたので早馬を隼（はやぶさ）と名づけた。黒髪で茶色い隼に乗った勇と沙織は京都より華やかで広い東京の町に訪れて棒手振（ぼてふ）りの魚売りや水売りや金魚売りや花売りや松茸売りや蕎麦売りと飛脚（ひきゃく）の手紙や金銭など運び屋と遊行（ゆぎょう）する芸人

たちなどあちこちでたくさん商店が立ち並んだ物売りや修繕屋と宗教者と医者や易者と砂描きと人力車夫などが働く通りを動いた。勇と沙織は隼から降りて隼を休ませて温泉宿で串焼きの郷土料理を食べて温泉に浸かり旅の疲れを癒した。勇はしばらく泊まりで温泉宿に下宿することに決めて沙織と別行動になった。1870年三菱財閥の創業者である岩崎弥太郎の盛大なパーティーが東京の明治坂で行われていた。勇は温泉宿に置いてあった大新聞で見て、龍馬の友人である弥太郎から近江屋事件について、有力な手がかりがないかパーティー会場を訪ねた。勇は着物姿から袴を装って宴会場のパーティー会場に出向いた。弥太郎は、「海援隊の支援もあって坂本龍馬の意志を受け継ぐことができた三菱グループ開業に祝いたいと思います！ 乾杯！！ どうぞ寛いでください！」と言った。勇は弥太郎が観衆から祝杯を受けて演説が終わった後で観衆に紛れた弥太郎のところに行った。勇は三菱グループと関係のないパーティー会場に偽って入って、弥太郎に話しかけることもできずに宴会場から、「厠にいく！」と言って席を離れた弥太郎の跡をついていった。勇は弥太郎に、「あの岩崎さん！ 龍馬さんと知人である者です！ 少し聞いてもいいですか？」と尋ねた。土佐弁で弥太郎は、「なんやか？」と言った。勇は、「近江屋事件の事です。犯人が誰かを知ってるんじゃないのか？」と聞いた。弥太郎は、「わしは何も知らんがや！ 早う厠に行きたいんじゃが！」と答えた。怒った勇は、「嘘つけ！ 誰なのか知ってるだろ！ あの夜に龍馬さんが近江屋にいることを誰かに密告したんじゃないのか？」と聞いた。勇は弥太郎に黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒を手を取った。勇は、「いわねえと この妖鬼棒でおまえのあそこぶっ潰すぞ？」と聞いた。しょんべんちびりかけた弥太郎は、「まかしちよけえ！ 素直に話すちあ！ わしはお城から遠く離れた身分の低い地下浪人（じげろうにん）で龍馬は城から近い家柄も顔立ちも良うて女子（おなご）にモテて憎うて気に食わざった！ 長州藩の誰が近江屋におることを教えたが、龍馬を暗殺した刺客（しきやく）など誰か知らんげに！ 右腕に赤い痣（あざ）がある男やかと聞いたちや！」と答えた。勇は、「右腕に赤い痣！」と言って妖鬼棒に呪文を唱えて黄金の鬼の飾り物に戻した。弥太郎は、「龍馬に悪かったと思うちゅう！ わしはな龍馬に代わって夢を継いだんや！」と言った。勇は、「俺は龍馬さんの果たせなかった夢を叶えに蝦夷地へいくから」と言ってパーティー会場から去った。勇は弥太郎に酷いことを言ってしまったと思いながら袴から着物姿に装って沙織のいる温泉宿に戻った。

斬妖刀争奪戦

東京の温泉宿に戻ってきた勇は沙織に、「ただいま！ 思いっきり東京の散策したよ！ 明日は明治天皇のいる皇居にいく」と言った。沙織は、「おかえり！ 私も明日、東京巡りでもしてこようかと思ってる」と言った。勇は、「おもしろいところがあったら教えてよ！」と言った。勇と沙織は夜になって暗くなってくると、夕飯を食らって温泉に浸かって、寝間で休んだ。朝起きて仕度をした勇は沙織に、「いく！」と言った。沙織は、「行ってらっしゃい！」と言った。水堀に囲まれてる三つの天守閣に3人の武将がそれぞれいる江戸城はとっくの昔に大地震で焼失して城跡しか残らない場に皇居があって、そこに明治天皇がいる。皇居にたどり着いた勇は皇居の大手門をくぐって、明治天皇のいる宮殿に歩いてきた。接待役で執事の有吉佑之助（ありよしゆうのすけ）は勇に、「お待ちしておりました。相生さんですね」と言った。勇は、「はいそうです！ 斬妖刀を返してもらいにきました」と言った。有吉は、「相生さん！ こちらへどうぞ！ 陛下がところへお連れします」と言った。勇を陛下のいる皇室に連れてきた。勇は明治天皇に、「斬妖刀を返していただきにはるばる伊賀の里から参りました」と言った。明治天皇は、「それは遠いところからご苦労であった！」と言った。「伊賀国の忍びと聞いていたが、おぬしがそうなのか？」と聞いた。勇は、「そうです！ このような出で立ちでございます」と答えた。明治天皇は、「未来では物の怪退治をする故に物の怪界の支配から大和を救ったと孝明天皇から聞いている。確かに斬妖刀を返すといったが、タダとはわわない！」と言った。途中で割り込んできた有吉は、「この者に剣士たちと腕試しさせてみてはいかがででしょうか？」と聞いた。明治天皇は、「この世の物の怪を退治するために、どれくらいの腕があるかを見させてくれ！」と答えた。勇は、「元々、その刀は自分の物だったので！」と言った。明治天皇は、「我が国に英雄が必要だ！ よろしく頼む！」と聞いた。勇は、「わかりました！ 必ずや斬妖刀を取り返して見せます！」と答えた。勇は有吉に導かれた皇居東御苑の休所に設けた格技場にやってきた。有吉は勇に、「ここで3人の剣士と一人ずつ戦って倒していけば勇者と見なされるぞ！」と言った。勇は、「そうですか！ 判定とかどうみますか？ 忍術は使えますか？」と聞いた。有吉は、「どちらかが血を流すことになる。どんな武器でもいいが忍術は使えない」と答えた。一人寂しく待ってる沙織を置いてきた温泉宿に戻りくなった勇は、「わかりました。やってみますよ！」と言って皇居の客室でお風呂に入って食事を摂って一晩休んだ。引札配りが宣伝チラシ用の引札を東京の町に貼って通行人に配っていった。歓声上がる町人の集まった格技場で明治天皇は、「疫病を流行らした頃に現れました妖怪たちを退治できる最強の剣士を決める決闘が始まります！」と言った。有吉は、「激動の時代を越えて未来で物の怪退治した勇ましい相生勇の登場です！」と言って黒装束を装った勇が格技場の舞台に

現れた。対戦相手を紹介する有吉は、「敬する宮本武蔵に憧れて東京にある剣道場の生徒80人を斬り裂いた松岡秀（まつおかしゅう）抜刀齋の登場です！」と言って二刀流で袴を着た松岡抜刀齋が格技場の舞台に現れた。審判員の有吉は、「始め！」という合図で開始した。鞘から抜いた長刀と短刀を両手に持った松岡抜刀齋と背なかに背負った忍び刀を抜いて構えた勇は和太鼓の音が踊り出したと同時に剣の斬り合いを始めた。勇は和太鼓の鼓動がなり響いた格技場で、命を懸けた戦いに挑んで斬り合い好きの狂気で殺人鬼の松岡抜刀齋の二刀流の剣さばきの攻めを防いでいくまでの競合いの中でなかなか真っ直ぐに伸びた短い忍び刀では斬り裂くことができず突いていったが、防がれて突き刺せなかった。刃物のように尖った目をした松岡抜刀齋は、完璧な防御を持って迫ってくる攻撃を一瞬にして、後ろに宙返りしていった勇が忍び刀の鋭利な刃を向けて投げつけたが、簡単に短刀のほうで払われた。勇は、その隙に黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒を手にとった。勇は手拭いをしよった松岡抜刀齋の攻めを防いで松岡抜刀齋を上段構えで頭を叩いて、右手に持った短刀を弾き落として松岡抜刀齋が刀を上げたときに、横構えで松岡抜刀齋の腹を左右に打って伏虎構えで股間を打った。勇は松岡抜刀齋が横たわってる間で落とした忍び刀を取って、背後に危険を感じて斜め後ろから刀を上げて迫る松岡抜刀齋を忍び刀で斜め後ろから突き刺して松岡抜刀齋を倒した。有吉は、「松岡抜刀齋は敗れました。次の対戦相手は坂本龍馬暗殺を実行した主犯格と思われる謎の鎧武者の登場です！」と言って鎧の甲冑を身につけて兜を被る面頬（めんぼお）で素顔を隠して槍を持った鎧武者が格技場に現れた。有吉は、「始め！」という合図で開始させた。忍び刀を鞘に閉まった勇は、龍馬を暗殺させた重要人物が誰なのか解ると思っ、なんとしても鎧武者が勇に槍を向けて攻撃してくるたびに、妖鬼棒で防御していった。鎧武者が槍で突いてくるたびに勇は、「栄冠を獲るのは俺なんで！」と言って妖鬼棒で中段構えで払って行って、下段構えで返して、鎧武者が持った槍を払い落とした。侮（あなど）った鎧武者は刀を鞘から抜いて構えた。勇は鎧の隙間を目がけて忍び刀を突き刺して殺してしまっは意味がないと思っ、ここはあえて鞘から忍び刀を抜かずに妖鬼棒で立ち向かうことにした。勇は鎧武者が刀で攻めてくるたびに、妖鬼棒で防御していったが、鎧武者のかんりの剣術の腕前に攻撃を受けた。勇は攻めてくる刀を妖鬼棒で防いでいくたびに力尽き左腕をすり斬った。負けずを払った勇は鎧武者に上段構えで頭を叩いて横構えで腹を左に右に打ったが、兜を被って鎧を背負った鎧武者に何も打撃を与えなかった。勇は鎧武者が上段構えで斬り裂こうとしたときに上一字構えで防いで隙を見た鎧武者の腹を蹴って、鎧武者が後ろに倒れそうになった。鎧武者が状態を直して勇に刀を振ろうとしたときに、勇は柔術で鎧武者の刀を持った腕を取って一本背負いをして投げた。重い鎧を背負った鎧武者は刀を手放して、仰向けに倒れた。勇は立ち上がることができない鎧武者の面頬を妖鬼棒で突いて突いて行って、面頬を断ち割ったときに格技場の観衆が驚いた。その素顔は長州藩の藩士で真剣を用意ない逃げの達人の桂小五郎だった。勇は小五郎に、「どうして龍馬さんの暗殺計画をしたんですか？」と聞いた。小五郎は、「龍馬は禁門の変で争った薩摩藩と長州藩の仲介役で薩摩藩の武器と長州藩の米を交換させて同盟を締結させて朝廷のいる新政府軍が旧幕府軍と戦って討幕させた。黒船が来航してきたときから異国に占領されない同等の力を付けなければこの国は滅びると幕府のやり方に不満を感じていったことが、討幕を狙った龍馬に幕府の手がかかって、

寺田屋事件が起きたことで私が龍馬に渡した銃で役人たちを撃って死傷させたことで龍馬を殺す気もなかった私が護身のために渡した銃のせいで幕府に狙われた私が龍馬を憎んで攘夷派の長州藩の志士か討幕で苦しむ薩摩藩か長州藩の誰かを近江屋に送り込んで中岡慎太郎と共に殺害したと疑われた。私は幕府が新撰組を近江屋に送り込んで龍馬を暗殺させたのじゃないのかと思っていた」と答えた。

勇は鎧武者が身動きができなくなったために判定勝ちとなった。有吉は、「最後の対戦相手は殺し屋の悪人が六道輪廻の地獄の餓鬼道に堕ちて餓鬼道でさまよい哀れて愚かな餓鬼たちの魂をよせ集めて行って、あの世から蘇った大きな餓鬼（がき）の登場です！」と言って、囚われた亡者（もうじゃ）の痩せて腹が膨れ落ちた金砕棒（かなさいぼう）を持った大きな餓鬼が格技場に現れた。有吉は、「始め！」という合図で開始させた。大きな餓鬼は勇に金砕棒を振り回しては場外に出て上段構えで勇の頭を叩こうとしては勇がうまく避けていくたびに庭の石灯籠などを破壊していった。落ち着きがなく場内に戻された大きな餓鬼は勇と再び戦い始めた。大きな餓鬼はなんでもこなごなにす金砕棒を上段構えで攻めてきて、勇が決して折れることない黄金の妖鬼棒を卍構えで金砕棒の攻撃を受けとめていった。大きな餓鬼は大上段構えで勇を頭を叩こうとしたときに勇は、「怪物め！」と言って、上一字構えで防いで金砕棒を解き払って仁王構えで妖鬼棒を振るって大きな餓鬼の腹を打って膝まづかして忍び刀を鞘から抜いて大きな餓鬼の腹を忍び刀で突き刺してえぐって引き裂いて大きな餓鬼を倒した。大きな餓鬼からいくつかの魂が抜けて行って、餓鬼道に戻った。有吉は、「所詮は償い受ける囚人たちを斬り捨てて勝者の相生勇に斬妖刀が手渡されることになりました」と言った。天皇陛下から悪霊祓いである金の鍰（つば）で赤い鞘の般若波羅蜜多（はんにゃはらみった）という文字が刻まれた斬妖刀を選ばれし旅人の相生勇に手渡された。明治天皇は勇に、「先ほどは見事であったぞ！母国のためにも物の怪と戦ってくれないか？」と聞いた。勇は、「はい！承知しました」と答えた。龍馬暗殺計画で主犯格の小五郎は証拠不十分のために、釈放となった。京都見廻組に犯人がいると思っていたのは憶測だった。それに真犯人は誰か教えてくれなかった。沙織のいる温泉宿に戻った勇は沙織に、「ただいま！」と言った。沙織は、「おかえりなさい！遅かった！あれ！左腕の傷はどうしたの？」と言った。沙織に斬妖刀を見た勇は、「剣士たちと腕試しをしてきたよ！」と言った。沙織は、「すごい！さすが達人！」と言った。勇は、「東京の町に行ったときに良いお店あった？」と聞いた。沙織は、「あった！美味しいお菓子のお店を見つけた」と答えた。勇は、「じゃあ！そこにいこう！」と言った。沙織は、「うん！いこう！」と言った。それから勇は、「錆びついた斬妖刀を研ぎにいってくる！」と言って温泉宿から外に出て隼に乗って東京の疾風（しっぽう）を駆け抜けた。東京の町の鍛冶屋を訪ねた勇は、「ごめんください！」と叫んで鍛冶職人を呼んだ。奥から歳をとった鍛冶職人で研ぎ師の松原永作（まつばらえいさく）が現れた。松原は、「いらっしゃいませ！どう致しましょうかな？」と聞いた。勇は、「この錆びれた刀を研いでほしい！当分は手入れをしてなかったで綺麗に研いでください」と答えた。松原は、「鞘に徳川家の葵の家紋があります。曹洞宗（そうとうしゅう）の僧侶たちが般若心経（はんにゃしんぎょう）のお経を唱えて刀に般若波羅蜜多（はんにゃはらみった）の文字が刻まれた徳川家康が妖（あやかし）を懲らしめるために持っていたと言う悪霊祓いの斬妖刀ですか？」と聞いた。勇は、

「そうです！家康から服部半蔵に手渡って伊賀の忍びで半蔵と同じ輩（やから）だった先祖の相生悟（そうじょうさとる）に譲られて相生家の家宝とした」と答えた。松原は、「そうでしたか！私は名の知れた研ぎ師ですのでお任せください」と言って斬妖刀を砥石で研いだ。しばらくして松原は、「出来上がりました」と言って研ぎ澄まされた斬妖刀を見せた。伝説の勇は、「時間はかかったけどいいことはない！」と言って斬妖刀の刃切れの良さに満足して着物を装って温泉宿へ戻りいった。

魔女の棲む館

西洋物の怪が人間に化けて色褪せた蒸気船に乗って横浜港にやってきた。ペルーの黒船が来航したときからか運河で土を運んで埋め立て土地を広めるまでは江戸よりも大きかった川越藩の警備隊が横浜まで見廻りにきた。志士たちは馬に乗って走らせてるロシア人ふたりを太刀で斬りつけて馬から落ちて立ち上がるロシア人ふたりがサーベルを抜いて立ち向かったが、志士たちに斬り裂かれた。度々と外交問題が起きて事件の犠牲となったアメリカ人とロシア人などは外人墓地に葬られた。勇と沙織は朝起きて温泉宿から外に出て、隼に乗って横浜の銀行へ埋蔵金を通貨にして、一部を預けにいった。隼に乗った勇と沙織は、大砲を積んである蒸気船に乗って、運河に繋がった隅田川を渡って横浜港へ向かっていった。航海中に現れた覚束ない中国の海賊船らしき船を蒸気船の船長が双眼鏡を覗いては確かめていたらどうも海賊船じゃない幽霊船がこっちへ近づいてくることがわかった。蒸気船に近づいてくる幽霊船の海賊の骸（むくろ）たちは蒸気船に向けて弓で矢を放った。船長は幽霊船に向けて大砲で砲撃して幽霊船を撃破した。破壊した幽霊船は、沈没寸前で水を司るといふ鬼の化け物である水鬼（すいき）となって、海から蒸気船に飛び乗ってきた。隼から降りて休ませて船内で寛いでいた勇と沙織は異変に気がついた。勇は沙織をどこかに避難させて、何があったのかを確かめにいった。頭に角2本が生えた水色の肌の水鬼は三叉槍（さんさそう）で乗客たちを突いていって、舵を取ってる操舵室のところに来た。水鬼は船長に、「わしの海の壁の領域を動いているものとはうぬか？」と聞いた。船長は、「乗客を運ぶのが私の役目だ！ 仕方がないだろう！」と答えた。水鬼は、「止めないというのか？」と聞いた。船長は、「やもえないようだな！」と答えた。水鬼は、「さもないと！ この三叉槍でひと突きだ！」と言って、勇は、「やめろ！」と言って、三叉槍で船長の腹を突こうとしたときに背に背負った鞘から斬妖刀を抜いて真っ向斬りで三叉槍を払った。水鬼は、「おぬしは誰だ？」と聞いた。勇は、「伊賀の忍び相生勇と申す！」と答えた。水鬼は、「おらの海を荒らす者などは容赦せん！」と言って操舵室から出たら勇に三叉槍で攻撃していった。斬妖刀を再び手にした天下の勇は斬妖刀で攻撃を防御して鬼に火炎火遁の術で火炎を放った。水鬼は勢いのある水を放って火炎を解き払った。勇は火遁の術の効果がないと思って、仕方がなく斬妖刀だけで攻撃していった。水鬼は海の波を引き寄せて船が揺れ動いて水しぶきが上がって勇の斬妖刀の攻撃を妨げた。勇は雷神音遁の術で轟音を響かせて、超音波で海水の水しぶきを跳ね返して斬妖刀で攻撃していった。水鬼は三叉槍で勇の斬妖刀の攻撃を防御してかわして、勇の左肩に三叉槍を突き刺した。勇は左肩に突き刺さった三叉槍を強く掴んで斬妖刀で水鬼の腹を斬り裂いて倒した。勇は左肩に突き刺さった三叉槍を引き抜いてしゃがみ込んだ。平安時代では武将の藤原千方（ふじわらのちかた）

に仕えた四鬼（よんき）の水鬼の他に火鬼（かき）と金鬼（きんき）と穩行鬼（おんぎょうき）がいた。束ねていたもじゃもじゃの長髪を解いた歌舞伎面（かぶきずら）の藤原千方のところに金槌（かなづち）を持った金色の肌で頭に2本の角の生えた金鬼がやってくると蒸気船で水鬼が忍びと戦って敗れたことを伝達した。沙織は屈（かが）んだ勇のところへ蒸気船にある贈り物用の焼酎入りの陶器で出来た壺と手拭いを勇に持ってきて渡した。勇は消毒代わりに焼酎を口に含んで左肩に吹きかけて血を止めた手拭いが真っ赤に染まった。乗組員たちは水鬼を海に投げ込んで沈めた。蒸気船はだんだんと横浜港に近づいて横浜に到着した。横浜に着いた勇と沙織は、時代の変革が起きた西洋風の建物が建ち並ぶ横浜の町の馬車道に沙織の乗せた隼を勇が引っ張った。あいすくりんという看板に目がとまって隼から降りた沙織と勇は、幕府の派遣した使節団は船に乗って渡米して、使節団と一緒に乗船していた勝海舟と福沢諭吉は別の船に乗って、日本に帰国して洋菓子のアイスクリームを持ち帰って、横浜開港の翌年に横濱アイスのあいすくりんを製造して発売した。勇と沙織は横濱アイスをひと口であまりにもおいしさに目が丸くなって、新しい風情を感じた。沙織を隼に乗せた勇は、隼を引っ張って第二国立銀行へ向かった。第二国立銀行に着いた勇は、沙織を待合室で待たして埋蔵金を藩札に切り替えて半分位までを貯金した。沙織を馬に乗せた勇は隼を引っ張って宿を探しにいった。勇と沙織は前方からひときわ目立った町娘のはいからさんが通り向けた。妖艶に惹かれて魅了された勇は、奥ゆかしい町娘の跡を追って、沙織を乗せた馬を引っ張っていった。沙織は勇に、「やめて！ そんな付きまといみたいなこと」と問いかけた。勇は、「あの子には何か妖気を感じてるんだ！」と答えた。疑った沙織は、「とかいって！ あの子に気があるんでしょうね！」と言った。勇は、「違よよ！」と言い逃れした。町娘は身の毛がよだつ薄気味が悪い西洋風の館に入っていった。沙織は、「ホントだ！ 何かありそうだな！」と独りごとを言った。勇は沙織は、「この館にいい宿がないか訪ねてみよう？」と聞いた。沙織は、「いいかもしれない」と答えた。沙織を隼から降ろした勇は、館の玄関の扉を叩いて開いてみて沙織と一緒に館内を覗いて見た。勇は、「ごめんください！ 誰かいませんか？」と訪ねた。尻尾を突っ立て短毛で黄色の瞳の黒猫がやってくると、それを追いかけてきた町娘がやってきた。黒猫を赤児（あかご）のように抱き上げてきた町娘は勇に、「どなたですか？」と聞いた。勇は、「すいません！ ただの旅のものです」と答えて、「この辺りに宿ないですか？」と聞いた。町娘は、「そしたらこの館で泊まってらしたら」と答えた。館の中の様子は外から見たよりも以外といい感じだと思った勇は、「それは助かりますよ！」と言った。勇と沙織は館の中に入っていった。町娘は勇と沙織をシャンデリアとテーブルとイスとソファと暖炉のある居間に連れてきた町娘は黒猫を床に置いて、「初めまして私は桜井恵美（さくらい えみ）と申します！」と言った。勇は、「初めまして俺は相生勇です！」と言った。沙織は「初めまして、私は川村沙織です！」と言った。気立てが良くて可愛い恵美は、「泊めてあげる代わりをお願いごとを聞いてもらえますか？ 私は3日ほど外出します！ その間は黒猫のネロの面倒をみてもらいたいです！」と聞いた。勇は、「ただで泊まれるのならお安い御用です！」と答えた。勇は、「他に誰か面倒を見る人などいないんですか？」と聞いた。恵美は、「私は幼い頃に両親を事故で亡くして兄妹もいません！ 祖母いましたが、どこかにいなくなったのです」と答えた。勇と沙織は、「そうですか？」と聞いた。恵美は、

「そうなんです」と答えた。恵美は、「私は朝から祖母を探しにいて参りますのでよろしくお願ひします。ネロを絶対には外に出さないようにお願ひします。それと2階の奥の部屋には何があっても入らないでください」と言った。勇と沙織は、「わかりました」と言った。勇と沙織は恵美に階段を上ったところの2階にある部屋を案内されて部屋でゆっくりと寛いだ。一夜を過ごした勇と沙織は、朝に起きて玄関のところで恵美がネロをおいて館から外へ出ていった。恵美から禁止事項を受けてネロを預かる勇は、ネロについてよく見ると、尻尾が2本あることに気づいて普通の猫じゃない猫又（ねこまた）と思った。勇は、「いや違う！ 烏猫（からすねこ）の黒猫は魔除けとなって、災いから身を守ってくれる幸運の招き猫だ！」と呟いた。しばらく部屋で面倒をみることにした勇と沙織は、たまに爪を隠して肉球で歩く忍び足で足音せずに近くにいたりするので、びっくりして猫が獲物を捕らえるときに身についた忍び足を学んだ。狩を楽しむ猫じゃらしでネロと遊んであげていた勇は、時計のない館で夜になってネロの猫目の瞳孔が丸くなってたのを見ると、猫の目時計で22時頃だと解った。勇はネロに餌を与えたり、猫砂で排出物をさせたり自由に行き来ができるように部屋の扉を少し開けていた。時には館の庭の木に巻きつけて繫いで休ましていた隼に牧草の餌を与えに行った。湧水の水源とする井の頭池から御茶ノ水の水道橋を通っている神田上水を水路として木製の樋（とい）を架けて飲み水として通した東京の北東部にもっとも古い水道があったが横浜にはまだ水道が通ってなかった。だけど西洋風の館だけに東京から運んだ水を注いでいた加熱器で燃焼したお湯を浴槽に溜めた。勇と沙織は1階のバスルームでお風呂に浸かってシャワーを浴びて部屋のベッドで休んでは明け暮れた。3日目の夜を迎えた勇と沙織は、ひと休みをして翌朝に戻ってくるはずの恵美を待つことにした。寝むれずに勇は、「妖鬼棒を返せ！ さもないと呪うぞ！」と悪魔の囁きにうなされた。しばらくして勇は、沙織と一緒にベッドで眠っているときに愛嬌のあるネロの夜の大運動会が始まって、ネロが勇を鬼ごっこに誘って扉の向こうから「ニャーン」と言った。勇は目が覚めると、ベッドから起きてネロのいる扉の向こうにいて、「いた！ 待てー！」と言って捕ま得ようとする、ネロが走って逃げていくところを追いかけていった。可憐なネロを追いかけた勇は禁じられた奥の部屋の前を通っていった。勇は奥の部屋の扉の前で何かの物音を感じて異臭が漂った。どうしても気にかかる勇は、忠告を破って扉を開けてみようとしたら閉まっていた。なぜかそこにやってきたネロの首にひっかけてある紐の輪の鍵に気づいた。勇はもしかしたら、この鍵で扉が開くのだろうと思って、自由で気ままなネロの首に紐の輪でかかった扉の鍵を取って、扉のノブを回して開けた。注意を怠って部屋を開けた勇は、魔女の部屋で実験台に水晶玉の隣に何かを煮込んだ鍋の中から蜥蜴（とかげ）を混ぜ合わせた歪（いびつ）な臭いした。勇は物音を感じた箱型キューブが揺れているのじっと見ると、箱型キューブが浮かび上がって部屋から外へ飛んでいった。勇は台の上に置いてあった銃を持って部屋から出て、上下左右に飛んでる箱型キューブを銃で撃って1発で命中した箱型キューブが破壊されると、羽を広げた吸血鬼で蝙蝠男のアレクサンダーが飛んで現れた。勇はアレクサンダーが襲いかかってくるたびに火炎烈火の術でものすごい勢いの炎を放って威嚇した。勇は吸血鬼の弱点が十字架と大蒜（にんにく）と知って1階まで下りてキッチンルームへ走っていった。勇はキッチンルームに大蒜がないと思って、追りくるアレクサンダーを火炎烈火の術で振り

切って居間へ十字架を探しに向かった。やってきた居間で十字架が見あたらずに焦った勇は、アレクサンダーがこなかったから沙織を心配して沙織がベッドで眠っている部屋へと向かっていった。アレクサンダーはベッドから驚いて起きた沙織の首を牙で噛んで栄養源とした血を吸おうと、アレクサンダーが沙織の処女のような生き血をひと息でかぶりつこうとしたときに、勇がアレクサンダーの頭を抑えて沙織から取り払おうとした。沙織はベッドの近くにある窓のカーテンを強く握り締めてカーテンを落とした。ヴァンパイアのアレクサンダーは陽の光に参って燃えて煙たくなると腕（もが）き暴れた。陽の光に弱いことに気づいた勇は、館にある窓のカーテンをすべて開いて行って、腕き狂ったアレクサンダーが部屋から出て行って、1階に落ちて煙となって消えた。勇と沙織はネロの無事を祈って探しにいったが、どこにどこへ隠れたのか見つけ出せなかった。勇と沙織は部屋に戻ると、アレクサンダーが煙が充満して煙たくなった部屋の窓を開けたことに気づいた。ネロはどうやら部屋を離れている間にここから出ていったらしいと思いついて脱走騒動が起きた。ちょうどそのときに恵美が帰ってきた。勇と沙織は恵美に、「おかえりなさい」と言った。恵美は、「ただいま！」と言った後で様子がおかしいと思って、「どういたしました？」と聞いた。気を引き締めた勇は、「すみません！ 誤って奥の部屋を開けてしまいました。そこに現れた吸血鬼に陽を浴びさせて食い止めたときに、2階の窓を開けていたことに気がつかずに1階にネロを探しにいった隙に外へ出たみたいです」と正直に答えた。恵美は、「え！ あれだけ外へ出さないでといったのにネロの監視のもとで部屋を貸したので罰金を払ってもらいます」と怒って言った。お金があってもそんな大金は払いたくないと思った勇は、「2階だから窓を開けても大丈夫だと思ったけど、塀をつたって行って、降りたみたいだ！ 猫には磁気のようなものがあって帰ってくる方向が解るはずだ！ まだネロはその辺にいるかもしれない！ 探してくる」と言って沙織をおいて館から外へ出ていった。勇は魔女のような部屋とあの吸血鬼がなんであるか忠告を聞かず奥の部屋を覗いてしまったために館の周辺を探したが魅惑のネロは見つからなかったので横浜の町の商店街までネロを探しにいった。勇は商店街辺りをあちらこちらと探し回ってますます陽が暮れて商店街でちょび髭を生やかした三日月みたいに顎の尖ったインチキな商人の松木正夫（まつきまさお）と出会った。勇は正夫に、「この辺で尻尾が2本もあって、金色の瞳の黒猫を見かけなかったですか？」と尋ねた。正夫は、「見たような気がする。向かい側の店の屋根にいたけどいなくなった」と答えた。勇は、「どうもありがとう！」と言った。去ろうとしたときに正夫は、「待て！ 黒招き猫は厄除けになって、御利益も上がって商売繁盛しますよ！」と言った。勇は、「左手が拳がってる場合は人生運を招いて右手が拳がってる場合は金運を招くというがな！ この黒い招き猫は左手が拳がってる」と言った。正夫は、「左手が拳がってるのも御利益はあるんだ！」と言った。小判を持って赤い首輪に鈴の付いた前掛けのある招き猫は昭和の戦後からと思った勇は、「招き猫は瓢箪（ひょうたん）か福袋を持ってるんだ！」と言った。正夫は、「この招き猫はいつの日か未来人が持ってきた物だから縁起が良い！」と言った。勇は、「だけどこれはニセモノだ！ 青い首輪だし壱万両じゃなく千万両の小判を持っているはずだ！ それに未来人などいない」と言った。正夫は、「わかった！ そこまでいうなら仕方がないな！ とっておきの武器があるんで見ていってくれ？」と聞いた。勇は、「どんな武器だ！ ニセモノだったら承知しないからな！」と言った。正夫は、

「わかってます。さあ！ こっちです」と言って質屋の奥にあるからくり扉を開いた。正夫は勇を連れて行って、からくり扉から中へ入って、イギリス人の武器商人であるチャールズ・ワトソンを紹介した。チャールズは勇に、「私の名前はチャールズ！ 何が欲しいですか？」と言って武器を見せた。勇は、「俺は相生勇！ この銃はなんだか変わってますね！」と言った。チャールズは、「幼銃です！ これがあれば物の怪を倒せるよ！」と言った。勇は、「じゃあこの妖銃と弾と脇差（わきざし）を！」と言って支払った。チャールズは、「サンキュー」と言って妖銃などを手渡した。勇はからくり扉から出て質屋を出てネロを探しにいった。普通の猫が生けた屍を跨（また）いでしまって猫又となっていたネロは、商店街でともし火の脂を舐めて火車（ひぐるま）となった。火の放った大八車のような火車が突っ走ってくると、商店街の人々を襲っていった。火車の暴走を止めに行った勇は、火炎容体の術で全身から炎を放出して向こうから突進してくる火車に飛び乗った。勇は火車を脇差で刺そうとしたが、火車に尻尾が2本あるのを見てネロとわかって手を止めた。勇は火車に、「おい！ ネロ！ やめろー！」と言って交渉した。なぜか火車は勇を乗せたまま横浜港へ向かって行って、横浜港の海に投げ出された。火車は海中でネロとなって若々しい艶やか娘となった。勇は猫耳に尻尾2本があって意識を失い目を閉じた裸の艶やか娘を掴んで浮上した。勇は火を点した灯船のところまで泳いで行って、艶やか娘の女体を抱えて海から飛んで灯船の上に移った。勇は灯船で艶やかな娘に胸骨圧迫と人工呼吸して艶やか娘が水を吐くと、息を取り戻したら桜井恵美と一寸違わず似てた。艶やか娘は勇に裸を見られて恥ずかしそうに胸など隠した。勇は麗しく艶やか娘に、「あ！ ごめん！」と言って灯船の操縦室にあった着物を取りにいった。勇は、「救助用の浴衣あったから、これを着ろ！」と言って着物を渡した。猫は9回も生きかえる説がある。艶やか娘は、「ありがとう」と言って浴衣を受け取った。浴衣を着た艶やか娘は、「私が本当の桜井恵美で館にいたの祖母が化けたニセモノです。私は普通の猫でした。初々しい子猫のときに親猫の二匹が馬車に轢かれて天国に逝って、いくあてもなく野良生活が続いた。そして、生けた屍を跨いで猫又となった猫の私に魔女のアルゼンチーナがやってきて、魔法の杖で私に御呪（おまじな）いをかけて箱型キューブに閉じ込めて捕獲した。そしてあの館で私の祖母としてネロと名づけられて可愛がられた。祖母は黒魔術で動物を人に蘇る薬を研究した。私は実験台となったのです」と言った。勇は、「そうなのか！」と言った。艶やか娘は、「でも実験は失敗で終わった！」と言った。夜空から灯船に藤原千方が現れて、「水鬼を遣ったのはおまえだな？ この娘をもらっていくから、取り返したければ東京城にこい！」と言って上空へ恵美を連れさらっていった。勇は口寄せ術で大鷹を呼んで大鷹に乗って幻の江戸城へ向かっていった。誰も見えない幻の江戸城にたどり着いた勇は、黒装束を装って城の中に入っていった。勇は急な階段を上って行って、摩訶不思議な仮想空間であることを知って、1階の辺りを見わたした。最上階まで4階あることがとわかってる勇は、この階は何も気配を感じずに2階へ上がっていった。勇は2階の辺りを警戒して歩いていくと、頭に2本の角が生えた赤い肌の火鬼が現れると勇に向けて口から猛烈な炎を放ってきた。勇は火炎火遁の術で攻撃してくる炎を跳ね返して払って炎が大柱に燃え移った。火鬼は勇に、「ここを通す訳にはいかない！ この階ですべておじゃんにしてやろう！」と言って、鬼金棒（ききんぼう）を振り回し攻撃に行った。勇は黄金の鬼の飾り物に呪文を唱えて妖鬼棒を手にとって

攻撃を返していった。勇は、「ずうずうしいにほどがよすぎる」と言って、火鬼の振り回してくる鬼金棒を妖鬼棒で受けて火鬼の顔を打って、火鬼が後ろに仕向けて背なを打って斬妖刀を抜いて火鬼が振り向いて鬼金棒を振り上げて攻撃しようとしたときに斬妖刀で火鬼の横腹を横斬りして倒した。勇は武器を持って3階へ上がっていった。勇は3階の辺りを見わたして歩いていくと、頭に2本の角が生えた黒い肌の隠行鬼が現れたら呪術（じゅじゅつ）で姿を変えていった。隠行鬼はおちよくなって虎のはく製の置物に擬態したら虎となって勇を襲っていった。勇は火炎烈火の術でものすごい勢いの炎を放って、虎を追っ払っていった。隠行鬼は虎から鷹のはく製に擬態したら鷹となって勇を飛び回りながら襲いかかっていった。勇は迫りくる鷹に向けて回転式妖銃で撃っていった。鷹は羽を撃たれて床に落ちて行って、隠行鬼の姿に戻った。左腕を負傷した隠行鬼は、「よくもやってくれたな！ おまえをこの間から通す訳にはいかないぞ！」と言って剣（つるぎ）を取り出した。勇は、「冗談が通じないやつだ！」と言って斬妖刀を隠行鬼に向けた。勇は斬妖刀を上段構えで右から左から攻めて、隠行鬼が剣を上段構えで左から右からも防いだ。隠行鬼は剣で腹に突いてきたときに、勇が斬妖刀を中段構えで払って下段構えで剣を払い返した。勇の斬妖刀と隠行鬼の剣で斬り合い続いて火花散った。隠行鬼は勇を真っ向斬りで斬り裂こうとしたときに、勇が斬妖刀で左からきた剣を巻き返して隠行鬼を袈裟斬りで斬り裂いて倒した。煩わしい敵たちに滅入ってきた勇は武器を持って4階へ上がっていった。勇は4階の辺りを見回して先へ歩いていくと、金鬼が現れて勇に黄金の金槌であるハンマーを横から真っ向に振るっていった。そのたびに勇は瞬間移動の術で他の場所に移動してかわして行って、金鬼の背後に行ったときに妖鬼棒で金鬼の背なを打って妖銃で撃っていったが、びくともしなかった。金鬼は黄金のハンマーを振り回していくたびに床と壁などを打って穴をあけていった。勇は黄金のハンマーが床にはまって抜けなくなった金鬼の背後から斬妖刀で斬り裂いたが、鉄の体を持った金鬼には通じなかった。黄金のハンマーを床から抜き取って嘲笑った金鬼は、「どうだ！ わしの金の肌で守られた不死身の力はどうにもならんのだ！ すぐにでも印籠を渡してやる」と聞いた。勇は、「てめえがあのもじゃもじゃの髭親父にちくったのか！ だが鉄を通せるものがあるんだ！」と答えた。勇は妖銃の薬きょうを抜いて先っちょの鋭い弾を一発込めた。金鬼は、「うるさい！ 誰が髭親父だ！ 藤原千方様だろうがよ」と言って勇に黄金のハンマーを投げて縦に振り回した。黄金のハンマーは城の壁を突き抜けていった。黄金のハンマーを避けた勇は、「兄弟が揃って似たりよったりだ！」と言って妖銃を金鬼の頭に向けてなんとか引き金を引いていった。鋭い弾丸が金鬼の頭を貫通した。金鬼を倒した後の勇は肉体と精神がくたびれてきた武器を持って5階へ上がっていった。勇は最上階で辺りを見渡して歩いていくと、腰掛けの床几（しょうぎ）に座ってる藤原が居座っていた。藤原は、「おい！ 小僧め！ よくもわしの大事な護衛の四鬼を倒したな！ 血祭りにしてくれるわ！」と言って勇に魔術で5本の剣を放っていった。勇は斬妖刀で飛び交うすべての剣を弾いていった。勇は、「あの娘はどこだ？」と聞いた。藤原は、「この階にはいない！ 地下1階にいる。地下まで下りるには火の渦だ！ もう手遅れだろう」と答えた。東京城の5階までに炎上してきた。焦り出す勇は斬妖刀で攻撃していった。極悪卑劣な藤原は魔術で5階を迷路状態にした。迷路に迷った勇は幻夢か幻想かと思ったか隠れ蓑（みの）の術で壁に隠れた。藤原はところどころに大太刀で壁を斬り裂

いていった。藤原はここだと見破って壁を斬り裂こうとしたときに、勇が現れて攻撃した。攻撃をかわした勇は藤原と剣の決闘が続いた。勇は、「うぬのもとに早う妖鬼棒を返せ！ 呪われて死なず済むぞ！」と聞こえてくる闇の声に惑わされた。勇は動作が鈍って朱色と山吹色の妖石に願って投げて、ぬっぺぼうとなまはげが妖石から現れた。腑抜けの垂れ下がりおたんこなすのぬっぺぼうは、「私の好み！ 可愛いわね！」と言って藤原に向かっていった。間抜けなおかちめんこのなまはげは、「なまった生皮を剥ぎ取ったわ！」と言って藤原に向かっていった。藤原は顎下の無駄肉がめり込んで隠れた乳首を見せ散らかそうとするぬっぺぼうのどや顔が迫りそうになって、「そんな重たいお荷物などいらん！」と言って藤原になまはげが包丁を持って襲いかかった。大太刀で攻撃をかわした藤原は、魔術で両手に持った棒を回転させるとぬっぺぼうとなまはげは目眩（めまい）を起こして倒れた。九字護身法（くじごしんぼう）で<臨兵闘者皆陣烈在前>と呪文を唱えて気合い入れた勇は、藤原が攻撃してこようとしたときに吹き矢で毒針を放って、胡散臭い藤原の右目に命中して倒れた。立ち上がった藤原は右目に刺さった毒針を抜き取って、皮を破って大百足（おおむかで）となった。毒が効かなかった藤原は、かつて大百足を退治したはずだったが、薄臭い大百足は藤原の体内に寄生していた。あらあらしい大百足は口から硝酸を放っていった。勇は襲いかかる大百足を瞬間移動の術で他の場所へ移動しては斬妖刀で斬り裂いて行って、大百足の頭を斬り落として倒した。勇は妖鬼棒に呪文を唱えて黄金の鬼の飾り物にした。勇はたちの悪いやつらを倒して迷路状態が解いて炎上した5階に戻ると、火炎容体の術で全身から炎を放出して城の壁を突き破って脱出して、天守閣の屋根から水堀に飛び込んだ。水に濡れて火炎容体の術が解けた勇は、城の石垣をはい上って行って、城内に入っていった。勇は地下1階に下りて行って、空っぽの大きな武器の収納箱の蓋を開ければ布で口を塞がれて両腕と両足を後ろに縛られた恵美がいた。勇は燃える城が1階まで炎がまわって、いつ崩れるかわからないなかですぐに恵美を城から救出した。仮想空間は解けて焼失した幻の江戸城は消えていった。勇は落ちた黄金のハンマーを拾って、冥途（めいど）の土産（みやげ）に持って帰ることにした。勇はすべてをやり遂げて口寄せの術で大鷹を呼んで恵美と一緒に大鷹に乗って、横浜の魔女の棲む館へ向かっていった。魔女の棲む館に着いた勇は、「ただいま！」と言って、館の玄関の扉を開いた。清潔で純潔を守られてる沙織は、「おかえりなさい！」と言った。もう一人の恵美を見て驚いた沙織は、「どういうこと！」と言った。館の中から現れたニセモノ恵美は、「双子です」と言った。勇は、「嘘だ！ あなたは魔女です」と言った。ニセモノ恵美は、「ネロは人間になりかけて失敗した。人間になせたら恵美と名づけることにしていた」と言って魔法の杖で御呪いをかけてボサボサの緑色の髪で鼻と顎の尖ったアルゼンチーナとなった。恵美はアルゼンチーナに、「海水に浸ったときに、なぜか人間になったのに2本の尻尾と猫の耳が治らない」と言った。アルゼンチーナは、「それはな！ 海は生命の源だ！」と言って恵美に特別な魔法薬を飲ませて恵美の2本の尻尾と猫の耳が治った。石の壁で出来た巨人のゴーレムとゴーレムを妖術で操ってるゴーゴンが横浜の町中を襲いかかっていた。勇は外の異変を感じて藤原の悪戦苦闘の続いて際どい戦いが終わった後というのにまたかと思って、黄金のハンマーを持って館から出ていった。建物を破壊するゴーレムに対して勇は、「これでも食らえー！」と言って黄金のハンマーでゴーレムの両足を叩いていった。勇は

板石で出来た体の中は空っぽであるゴーレムの足を砕いて行って、足場を失ったゴーレムを崩れていった。頭に蛇がいくつも生えた女のゴーゴンが人々を石にしていった。勇はゴーゴンに向かって行って、仮分身の術で5体となって、ゴーゴンの周りを怪しく取り巻いた。ゴーゴンは通称ゼラという。勇はゼラの目が赤く光ったときにゼラを見ずに避けて行って、当たった仮の勇たちが石にされたことで気づいて茶色と灰色の妖石に願って投げて泥田坊とミイラ男が現れた。仮の勇の1体が残って、石にされる前に田んぼから現れた泥田坊がゼラの両足を掴んでへなちょこざいのミイラ男がゼラの顔を覆いかぶった。ゼラは下半身が田んぼに埋もれて行って、ゼラの頭の蛇たちがミイラ男に噛みついてミイラ男を解き払った。ゼラは泥田坊に両足を掴まれて泥田坊を振り払おうとしたときに田んぼに溶けていく泥田坊がゼラに向けて泥を覆い被せようとした。強欲傲慢なマズのゼラは泥田坊の一つ目に向けて目を赤く光らせて泥田坊を石にした。空から箒の穂先が後ろに向いた魔法の箒（ほうき）に乗ってきたアルゼンチーナは隙を狙ったゼラに魔法の杖で御呪いをしてゼラを箱型キューブに閉じ込めた。勇は、「ゼラを倒さなければ石にされた町人たちがもとの姿には戻れない。何かいい手段はないか？」と尋ねた。アルゼンチーナは、「魔法の鏡でゼラの目が赤く光ったら魔法の鏡を盾にして反射させるのだ！」と教えて勇に魔法の鏡を手渡した。アルゼンチーナはゼラを閉じ込めた箱型キューブを魔法の杖で御呪いをかけて解いた。ゼラは勇に向けて目が赤く光ったときの瞬間に、ゼラに魔法の鏡を向けて跳ね返した。勇は石になったゼラを黄金のハンマーで叩き割った。町人たちと泥田坊は石からもとの姿に戻った。アルゼンチーナは館へ戻って行って、勇たちも館へ戻っていった。猫又だった恵美はアルゼンチーナに、「私は人になったけど猫又に戻らない？」と聞いた。アルゼンチーナは、「今のところ戻ることはない！ 私も魔女には二度と戻らない」と答えた。魔法薬を飲んで櫻井トネとなった。普通の祖母に戻ったトネは恵美に、「それに西洋物の怪もいなくなった！ 霊媒師の仕事に戻ることにする」と言った。かぐや姫のような黒髪の妖艶な恵美は、「それなら良かった！ 何か起きれば勇さんが助けにきてくれますね！ それに私は魔法使いになります！」と言った。魔女の棲む館として誰も立ちよらなかった館は、身の毛がよだつ不気味さが解けて富が宿る館と変化していった。沙織は勇に、「なぜ猫と鬼ごっこした時に奥の部屋を開けたの？」と聞いた。紛らう勇は、「怪しげな物音がしたから！ だけど、この館の秘密を知ったことで問題を解決した」と答えた。勇は、「ネロを探しにいったときにちょっと商店街によって石鯨と脇差とペリーが来航するまで船上で鼠捕りに猫を飼っていたことから生まれた三色の幸運の招き猫を買ってきた」と言って、沙織に石鯨と脇差と幸運の招き猫を渡した。沙織は、「ありがとう」と言って風呂で石鯨を使った。勇も風呂の後に沙織と部屋で眠った。勇は、「なぜ妖鬼棒を奪った！ 今に見とれ！ おまえを呪い続ける」と脅迫的な声にうなされて目が覚めた。翌朝、二度寝して起きた勇はトネのところにいて、心の闇の声を相談した。勇の肩に手を当てた霊媒師のトネは、「霊聴を聞かしているのは生霊の怨念が憑依（ひょうい）しとる！ 生霊祓いをしてすぐに取り除かねばならん！」と言った。霊的なものしか見えないトネは、自滅しかけた勇に、「霊的な反応で蛇を肩に乗せた物の怪が見える。この物の怪は人を呪い殺す邪気がある。粗塩など効果がない」と言った。勇は、「俺は黄泉の郷で蛇骨婆の旦那のぬらりひょんから妖鬼棒を奪った！」と言った。トネは、「生きた生霊はなかなか解けない。皮肉な蛇骨婆と縁を

切るには妖鬼棒を返すしかない」と言った。勇は、「わかった!」と言った。勇は数珠を持ったトネに生霊祓いしてもらって、心の闇に病みつきの悪婆が潜んでいる蛇骨婆を退散させた。嫌がらせにお構いが無い強引な手口で取り戻そうとする蛇骨婆は勇に、「早う妖鬼棒を返さんか!」と言って生霊で現れた。勇は、「斬妖刀が戻ったんで! もう妖鬼棒は必要がない!」と言って黄金の鬼の飾り物に唱えて妖鬼棒にして蛇骨婆に向けて投げた。こぎつける皮肉な蛇骨婆は、妖鬼棒の先端がまっすぐ額に当たって倒れて、しばらくして起き上がってお目当ての妖鬼棒を手にとって去った。勇斗は報いを得て退散した蛇骨婆の呪縛が解けて蛇骨婆に余計な問題が消滅した。旅立つときがきた勇と沙織は恵美とトネに、「ありがとうございました! じゃあ元気で!」と言った。恵美とトネは、「また遊びにきてください」と言って勇と沙織は館から外に出て隼に乗って館を離れた。勇と沙織は横浜港に行く途中で隼から降りて写真を撮りに商店街の写真館で記念撮影をして写真館から外に出て隼に乗って横浜港へ向かった。黒猫は魔女の化身として不吉な迷信に根づいた。黒猫は胸に白い斑のエンジェルマーク（天使の印）があると、人々から危険と捉（とら）えることなく魔女狩りの対象にはならなかった。

餓狼の血族

横浜港にたどり着い勇と沙織は、横浜港で蒸気船に乗って東京へ向かっていった。勇と沙織は隼から降りてゆっくりと休んでいた爽やかな潮風に打たれながら蒸気船が海を渡っていった。勇は疫病神も追っ払って、もう呪いが憑いてくることはないだろうと潮風を感じていた。蒸気船で三叉槍が見つかったけど船長室に保管されることになった。東京にたどり着い勇と沙織は、隼に乗って船から降りていった。勇と沙織は食事を摂りに東京の町を進んでいって、東京の風物詩で富士山に見える日本橋まで行って、吉田屋の牛飯を食べた。牛肉の水牛が稲を耕すときに重要で神のような存在であったので町人は、罰が当たるとして口にしな者もいたが、西洋化で肉食が増えて多くの人が食べるようになった。勇と沙織は五街道の最初にある宿場町で江戸四宿（えどししゅく）に宿泊することにした。勇は沙織に、「恵美さんとネロが入れ替わっていたとはな！」と言った。沙織は、「恵美さんは魔女でネロがホンモノの恵美さんだったなんてね！」と言った。勇と沙織は温泉に浸かって、あの手この手とやってくる敵から逃れて久しぶりに骨休みした。勇と沙織はよく眠って目覚ましい朝を迎えた。勇は沙織に、「東京の町で和菓子の美味しいところ見つけたと言っていたよな！ 今日そこにいってみよう！ で！ 江戸城下を出よう！」と言った。沙織は、「いいよ！ そうしよう！」と言った。勇と沙織はしばらくして宿を出て隼に乗って東京の町へ向かった。東京の町に戻った勇と沙織は茶番屋で粉餅の和菓子食べてほうじ茶を飲んだ。勇は沙織に、「美味しい！」と言った。沙織は、「よかった！」と言って微笑んだ。勇と沙織は隼に乗って日光街道を進んでいって、奥州街道の追分（おいわけ）で重複した。勇と沙織は奥州街道を白河までの20里を27ヵ所の宿場町を経て宿場で休んで陸奥国まで果てしない旅となった。勇と沙織は奥州街道を進んでいく途中の宿場で休憩して、81ヵ所の宿場町を経て4、5日かかって青森宿にたどり着いた。大雪が降った津軽藩の青森宿は茅葺（かやぶき）屋根の宿場と多くの民家の道に積もった雪を農具で道側に払っていた。勇は夜になると、民家に雪女が出没するという噂を聞いてこないだ沙織が小雪娘だったことを思い出した。民家に忍び込む雪女は若い男に口から白い氷の粒の吐息を撒き散らして凍結させて肝を取り出しては食べていた。その噂を探りに向かった勇は宿から外に出てから、ある民家で雪女に遭遇した。勇は白い和服を着た雪女に、「おい！ そこでなにをしてるんだ？」と聞いた。雪女は、「腹が減ったから馳走様になってただけだよ！」と答えた。勇は雪女を見て沙織が小雪娘だった頃の顔がそっくりで、あどけない小雪娘を見るようだった。あどけない小雪娘は勇に、「なんなんだ！ あんたの肝も食べてやろうか？」と聞いた。勇に口から白い氷の粒の吐息を撒き散らそうとしたときに沙織が現れて、あどけない小雪娘に脇差で攻撃した。沙織は澄んだ水色の髪に白い肌のあどけない小雪娘を見て、あどけない小雪娘の時の私

を思い出して目の前にいるのはういういしい頃の16歳の私がいることに気づいた。あどけない小雪娘は沙織に、「なにしやがんだい！ あ！ なんであたいと似てる」と言った。軽やかでやわ肌の沙織は、「そうよね！ 私は昔、津軽藩にいて、そこから松本藩に移動した」と言って沙織が艶やかな黒髪から痛んだ髪的小雪娘となった。元の姿に戻った小雪娘は勇に、「ごめんね！ 私を人間にしてくれてありがとう！ 私はもともと小雪娘だから過去の自分と出会ったために消えてしまう！ 勇とずっと一緒にいたかった！ 平成時代に戻って雪女となる」と言って小雪娘は粉雪になって散らばった。勇は、「待て！ 沙織！」と言って悲しんだ。あどけない小雪娘は勇に、「そんなにめそめそすんなよ！ 未来の私なんだから消えた訳じゃないでしょう！」と言った。勇は、「君は俺とはまだ純愛を知らないだろう！」言った。あどけない小雪娘は、「愛とか知らないし人間になんかなりたいとは思わない」と言った。勇は、「君が大人になるまであと130年かかるだろうな！」と言った。小雪娘は、「うるさい！」と言って去っていった。勇はあどけない小雪娘を見て大人になった小雪娘でもなく沙織でもない別人を見るようで愛が冷めて冷たく感じた。勇は哀しみ拒む宿に戻って休むことにしたが、いきなり女神を失って牙を抜かれたようになってこれまでに愛する者に命を懸けてきた戦いもただ虚しいままとまって寝つけなかった。決して無じゃないと思直した勇はくだらないことばかり考えてはいられない。勇はいつかまたどこかで未来に行けば小雪娘じゃなく沙織に会えるだろうと思って眠りに就いた。翌朝に目覚めた勇は、隼に乗ってむつ湾まで突っ走って行って、むつ湾にたどり着いた。勇は隼に乗って船乗場の北前船に乗って隼を降りて休んだ。勇は沙織と一緒に横浜の町で写真を撮った時の写真を見つめると、沙織が徐々に消えていった。孤高の勇は蝦夷地に着いてから沙織と結婚しようと思っていた切ない愛が解けないままでいた。津軽海峡を通過していく北前船に乗った勇は太陽の光に輝かしい海のさざ波で素晴らしい光景を眺めた。勇は沙織が残した三毛猫の招き猫を形見に持って寂しい気持ちを押えた。龍馬を尊じていた勇は1869年に箱館が函館となって横浜港と神戸港と同じで貿易を行う函館港に着いた。隼に乗って北前船を降りた勇は外国と呼ばれた渡島国（おしまのくに）の蝦夷地に踏み入れた。勇は龍馬がなし得なかった大国造りを果たしに大国を開こうと北海に渡ってきた。勇は広い大地を駆け抜けて行って、龍馬の甥である坂本直と会って話をしようと思ひ返して、新政府の五稜郭基地の箱館奉行所へ向いていった。箱館奉行所にたどり着いた勇は龍馬が暗殺された志士の名誉を讀んで箱館奉行所の判事となって高松太郎と名を改めた直だったけど旧幕府軍が攻めてきたときに蝦夷地から撤退していた。勇は龍馬の姉の子である海援隊であった直がいなかったが、33歳の若さで逝った龍馬の職を失った浪士たちの蝦夷開拓と防衛の夢を受け継いで坂本一族を蝦夷地に連れてきた直の義理の弟の坂本直寛がいることを思い出した。勇は隼に乗って新天地で最後の宿場までいった。箱館宿に着いた勇は隼から降りて箱館宿で休んだ。勇は温泉に浸かって心と体を癒して夜になって眠りに就くときに、沙織のいないことに寂しさと哀しみの余りに思い出が込み上げて一粒の涙が出た。勇は蝦夷地にやってきて、そんなことばかり考えて仕方がないからばかばかしくて前に進めずに思えば幾度も危ない橋渡りをしてきたもんだなと思ひながら、いつの間にか眠った。朝起きた勇は、宿にあった暖かい湯呑みで溶かした紅茶に十勝国（とかちのくに）の少量の酪農牛乳と蜂蜜を加えて飲んだら、未来で味わったロイヤルミルクティーに似た味を思い出した。

勇は緯度を超えてから貫いて蝦夷地までやってきたが、いつかは龍馬が蝦夷地へ渡ろうとアイヌ語の本を読んで勉強していたようだ。アイヌ人はイギリス人の植民地が進んだ米国開拓時代の先住民インディアンのようにシャクシャインの戦いで松前藩に敗れて北へ追い詰められたことを未来にいたときに図書館で学んでいた。勇は宿から外に出て隼に乗って直寛を探しに当てもなく札幌村へ向かっていった。札幌村にたどり着いた勇は村人に、「坂本一族について詳しく知ってる者はいないですか？」と尋ねた。村人は、「知らねえが！ この辺りで子供たちが物の怪にさらわれてるんでな！ コロポックル村の小人族がいるところだ！ そこに行けば坂本一族の子もいるかもしれないがな！ なんやら手がかりになるかもしれない！」と言った。勇は、「コロポックル村はどっち方向にあるんだ？」と聞いた。村人は、「アイヌ語でトマクオマナイという地だ！」と答えた。勇は、「ありがとう！」と言って疲れを癒すために宿を探した。勇は隼から降りて隼を引っ張ってきて、隼を休ませて温泉はないが、お風呂のある宿に泊まった。朝起きた勇は宿を出て隼に乗ってトマクオマナイへ向かっていった。勇はトマクオマナイにたどり着いてコロポックル村を探しに行った。コロポックル村にて、烏天狗と同じ三冠王の雨河童（あまがっば）に琵琶湖の底にある海鱗城（かいりんじょう）を追いやられた大鯨狼（おおなまずおおかみ）が琵琶湖の空へ飛んで海に落ちた。大鯨狼はやがて陸上で生きるために擬人化して広い海を渡って北海にたどり着いた。大鯨狼はトマクオマナイに足を踏み入れて民家から子供ばかりをさらっては喰べたいが、じゃじゃ馬な女の子に出会って以来から子供たちを喰べれなくなった。さらわれた子供たちばかりのいるので小人族のコロポックル村と呼ばれた。コロポックル村に物の怪いるからか誰も立ちようとしなかった。大鯨狼は獲ってきた肉と魚など食べて子供たちに食べさせていた。大鯨狼はこざっぱりな小娘の直美にわがままを言われては歯が立たなかった。大鯨狼は直美に羊の肉のラム肉が食べたいなど駄々をこねられて困っていたが、ついに牧場の羊を探しに向かった。居心地が良くなった子供たちはコロポックル村から脱出しようとしなかった。大鯨狼は家畜で飼われた羊を探して牧場にやってきて、羊の群れを追い詰めて一匹でも仕留めようとしたときに牧場の農夫が猟銃で大鯨狼に向けて撃っていった。大鯨狼は浮遊しながらも農夫へ飛んで向かって行って、咬みつこうとしたときに馳ける馬に乗ってやってきた勇が攻撃を阻止された。その隙に農夫は逃げていった。大鯨狼は勇に、「何者だ？」と聞いた。勇は、「こっちが聞きたいね！」と答えた。大鯨狼は、「わしはコロポックル村の村長だ！ 子供たちに羊の肉を持ち帰るんでな！ 邪魔をするな！」と言った。大鯨狼は三日月刃の月牙鎌（つきがさん）を持って勇に月牙鎌を振るっては突いていった。勇は、「コロポックル村へ連れていけ！ 小人族は子供たちだろう！」と言って斬妖刀で月牙鎌をかわして行って大鯨狼にトドメを刺そうとした。大鯨狼は、「参った！ 降参する」と言って観念した。大鯨狼は勇をコロポックル村に連れてくると、喰べた子供たちの残骸をお魂（こん）入れの術でもとに戻していった。生きた子供たちと共にコロポックル村から解放して、両親のところへ帰っていった。唯一残った直美は、「あたい帰りたくない！ ここがいいの！ なんでも美味しい物が食べれるもん！」と言って、その場から離れなかった。勇は直美に、「兄上の名は何という？」と聞いた。おかっぱ頭でわがまま直美は、「坂本です」と答えた。勇は、「じゃあ！ 父上の名はなんという？」と聞いた。直美は、「直寛だ！」と答えた。勇は、「そうか！ 父上はどこにいる？」と聞いた。直

美は、「たぶん旭川村にいる」と答えた。勇は、「遠いな！」と言った。直美は、「お名前は？」と聞いた。勇は、「俺は勇だ！」と答えた。勇は大鯨狼に、「両親に会わずのために、この娘を連れていくぞ！」と言った。大鯨狼は、「わかった！ わがままな娘で大変かと思うがな！」と言って北海の海へ戻っていった。勇は隼に直美を前にして乗って旭川村へ向かっていった。勇と直美は長い経路を馳けてきた隼に乗った途中で、休みながらも半日かけて蝦夷地の中央にある旭川村にたどり着いた。勇は満月の夜になると、どこかで犯罪が起きてるといふから危険な前触れを感じた。勇と直美は夜遅いので風呂付きの宿に泊まることにした。眠り込んだ勇は、「ウォーン」と狼の雄叫びを聞いて目覚めた。勇はじゃじゃ馬な直美の悪戯（いたずら）かと思ったが、あざとい直美はぐっすり眠っていると、違うようだった。勇は怪奇的な夜に心が侘（わび）しいときに何か物足りない憎悪がさまよう得体のしれない気配を感じて眠れずにいた。翌朝起きた勇は二度寝をして昼まで寝ていたが直美の悪戯によって目覚めた。拗ねた直美は勇に、「おい！ 起きろ兄ちゃん！ どうもろこしが食べたい！」と言って布団ごと勇の上に乗った。勇は、「わかった！ あとで市場に行って買ってくるから」と言って直美を布団ごと解き払った。畳にひっくり返った直美は、「いてっ！」と言って起き上がり微笑んだ。布団から出た勇は、「市場でどうもろこしを買ってきてやるから部屋で待ってろ！」と言って宿から外へ出ていった。勇は旭川村市場までどうもろこしを探しにきた。貧相でみそぼらしい八百屋は勇に、「ここにはどうもろこしはない！ 山のふもとにある農園のどうもろこし畑に行けばたくさんあるがな！ だけど狼の森が近くあるんで気をつけて！ 旭川村は狼男にたびたび襲われてる」と言って、宿に戻って隼に乗って前触れが的中し危険に近づいていくようにどうもろこし畑へ向かっていった。どうもろこし畑にたどり着いた勇はここまできたら帰りは遅くなるだろうと思ってきたが、9月で収穫を終わっていた。勇はどうもろこしはないと思って、農家から収穫物の残りものがあると聞いてせっかくだんで完熟した新鮮などうもろこし3本を買った。旭川村に戻ってきた勇は隼から降りて宿まで隼を引っ張って歩いていたら、いきなり後方から大きな獣に襲われた勇は普通の狼とは違った擬人化した狼男だと思った。狼男は横たわる勇を噛みつこうとしたときに向こうから現れた黒い人狼が強者の狼男を牙で咬みついて、追い払ってくれた。黒い人狼は勇に、「大丈夫か！」と言って勇を起こした。よろめきながら立ち上がった勇は、「大丈夫だ！」と言って、「なんで狼なのに話すことができるんだ！」と言った。黒い人狼は、「それは狼男は狼から人間となって、人狼は人間から狼となるからだ！ 今日のような満月の夜では本能に目覚めて狼になる。なりたくはないと思うけど狼男になるには満月の夜に人間を喰らえば狼になれる。僕たちは狼男の類（たぐい）！ 竹田博士の長年の研究で造り出された狼男に咬みつかれた人狼になったんで人間は襲わない！」と言って狐に騙されたかのようにどこかへ消えていった。勇は驚いて逃げていた隼を口寄せ術で呼んで隼を捕まえてから宿に戻った。勇は直美に、「ただいま！」と言って部屋に入ると直美がうつ伏せ状態で倒れていた。驚いた勇は、「直美ちゃん！ 大丈夫か？」と聞いた。勇は直美を抱き上げた。目を開いて笑った直美は、「遅かったじゃない。どうもろこしは買ってきた」と言って死んだふりをしていた。勇は、「買って来たぞ！ 3本もな！」と言って女中にどうもろこしを湯がいてもらった。勇と直美は、「うまい！」と言って甘いどうもろこしを丸かじりで食べた。勇と直美は男女別の温泉に浸かって食事処で食べてゆっく

りと眠りに就いた。勇はあの時に黒い狼が助けてくれなかったとしたら狼に喰い殺されたか人狼となっていただろうと思って寝つけなかった。いつの間にか眠っていた勇はいたずらっ子の直美に、「お腹が空いたから食べに行きたいよ！ どこかへ連れて行って！」と喚いた。昼間に起こされた勇は、「わかった！ わかった！」と言って布団から出て起きた。勇は満月の夜になるとまた狼男が現れたら危険と思って明るい時間まで宿に戻りたいと考えた。勇はもしものときのために狼男の弱点の銀の弾6発を妖銃に込めておいた。勇と直美は宿から外へ出て隼に乗ってとうもろこし畑の向こうにある川へ向かっていった。勇は向かっていく途中で忌まわしい場所を通ったとき、狼男に襲われたことを思い出した。隼に乗った勇と直美は山の近くの川に着くと隼から降りて川に向かった。勇は直美が川で水遊びしている最中に川辺で鮎釣りをしていた。鮎が二匹釣れた勇は、川の向こうにある山のふもとの森から鳥のさえずりと林がなびく音と川の流れる音と狼男の遠吠えが聞こえた。ここにいたら危険だと思う勇は夕暮れどきに釣り竿と釣り籠を持って直美を連れて紐を木に繋げてる隼のところに行った。勇と直美は隼に乗って、旭川村の宿に向かっていった。勇は鮎釣りに夢中になって予定よりも遅くなったために、旭川村に着くまで日が暮れ始めた。勇は幸いに今宵が満月の夜じゃないと思って安心して進んできたときに、灰色の人狼と白い人狼たちがやってきた。人狼のひとは、「わしら本当は人間なんや！ 狼男に襲われて人狼になった！」と言ってその人狼は直寛に戻った。直美は、「父上！ 会いたかった！」と言って隼、から降りて直寛のところに行った人狼たちは浪士たちに戻った。直寛は勇に、「竹田博士を探してから人間に戻るための血清をもらってきてもらえないか？ 我々は狼一族を造り出した親のボスにさからえない」と聞いた。勇は、「わかった！ 人間に戻れるまで直美を預かっておく！」と答えた。直寛と浪士たちは人狼となってこの場を退いた。勇は直美を宿に戻して、直寛の率いる狼一族が人狼に戻った後で狼の森へ向かっていった。勇は謎に包まれた狼の森にたどり着いて隼から降りて隼を木に紐を繋いで木の枝を折って枝の先に布を巻いて火炎の術で枝の先に巻いた布に炎を放ったたいまつにして、怪しい霧の中を進んだ。勇は肌色の妖石に願って投げた妖石からろくろ首が現れた。勇はろくろ首の初音に狼男を誘（おび）きよせるために、赤ずきんの初音を囮にした。匂いを嗅ぎつけて現れた狼男は、挑発した赤ずきんの初音に向かっていった。赤ずきんの初音は本当の姿がろくろ首であるために驚いて首を長く伸ばした。たくましい体つきの狼男は吠えて立ち止まった。狼男が赤ずきんの初音に襲いかかろうとしたときに、勇は黄土色の妖石に願って、投げた妖石から白布が現れた。白布は一反木綿と醜い獣に分かれたら一反木綿が狼男の顔を覆い被したが、狼男に解かれて破られた。勇は醜い獣が襲いかかった狼男に咬みつかれて払われたときを狙って妖銃で銀の弾6発を撃ち込んで狼男を倒した。そのときに現れた黒い人狼は勇に、「なんでここに？」と聞いた。勇は、「尋ねたい事があって！」と答えた。一匹狼の黒い人狼は、「なんだ！」と言った。勇は、「竹田博士はどこにいるか教えてくれない？」と聞いた。黒い人狼は、「森の奥に行けば丸太小屋がある。そこにいるはずだけどな！」と答えた。邸宅の御曹司のような人間に戻った黒い人狼は、「僕の名前は桐生舜（きりゅうしゅん）という者だ！」と名乗った。勇は、「俺は伊賀藩からきた忍びで相生勇と申す！」と言った。勇は舜が握手してきたときに弥太郎さんが、「右腕に赤い痣がある男だ！」と言っていたことを思い出した。勇は舜に、「君の里はどこだ？」と尋ねた。舜は、「僕は京都！

新政府の弾圧に負けた浪士たちが集まって出来た浪士隊である新撰組のリーダーをやっていたことがある」と答えた。鋭い洞察力で心の中を見抜いた勇は、「もしかして近江屋で龍馬さんを殺めたのおまえなのか？」と聞いた。舜は、「まさか僕が！ はっはっはっ！」と笑って、「そうだ！ 龍馬とは江戸で剣術と一緒に習って学んだ同士だったけど近藤勇さんに頼まれて嫌とは言えなかった！ 剣術の恩師だけにね！」と答えた。勇は、「何かの腹いせとかじゃなくて！ いくら恩師の頼みであってもそこまでしなくたってよかったのに！」と言った。舜は、「僕は剣術は龍馬よりも上手だった！ それで見込まれたから剣の道は強い者だけが残る。けどなぁ！ 龍馬を殺めた犯人として汚名を晴らすことはできない！ 京都と東京にはいられなかったんで蝦夷地へ向かって身を隠した。そして狼男に出くわして人狼となって以来は、僕の行方など誰もわからなくなった！」と言った。勇は、「なんでそんなに情けを持たないんだ！」と言った。着物姿の舜は、「情けなんぞ！ そんなものいらない！ 強者だけが生き残る」と言って腰に巻いた帯に差した刀を抜いた。斬妖刀を抜いた勇は、「なんで俺を狼男から救ってくれたんだ？」と聞いた。舜は、「誤解しないでくれ！ 別に救った訳じゃないよ！ たまたま通りかかったときに僕と同じような目にあってる人がいると思ったからだよ！」と答えた。勇は、「君には思いやりもあるから慈悲を失ってない！ ならおまえの本心を思い出さしてやる」と言って斬妖刀を持って立ち向かっていった。勇は斬妖刀で攻めて防いでいったが、百戦錬磨の舜には到底かなわなかった。勇は剣の斬り合いが続いてへとへとになっていたときに、舜が高く飛んで着地したら側転して勇の後ろ側に着地して、刀で勇の背なを斬り裂こうとしたが、斬妖刀で舜の持った刀を払って舜がまた高く飛んだら勇も高く飛んで舜に袈裟斬りをして相打ちをしてお互いに着地した。腕をすり切った舜は、「やるではないか！ 僕の負けだ」と言った。勇は、「君は命の恩人だから殺すことができない！ 忍びと志士は献身なまでに剣術を学んできた！ 君は龍馬さんを殺めてしまって気が狂っている。近藤勇の指示どおり動いて巻き添いの犠牲となった！ まったく気の毒でない話だ！」と言った。舜は、「そんな見下した言い方なんてやめてくれ！ 僕は自我を壊されたんだ！ 不愉快な気分だ！ 人生なんてくだらない！ こんなに惨めな思いなんてしたくはなかったよ！」と言った。勇は、「君が悪い訳じゃない！ 情けを知らない者は死ぬよりも痛い思いをして生きるだけだ！」と言った。舜は、「もうどうだっていいんだよ！ 狼男に襲われなくなかったら、さっさと森から消えうせろ！」と言って人狼と戻ってどこかへ去っていった。勇は危機を免れて森の奥のほうの竹田博士がいる丸太小屋へ向かっていった。勇は窓から明かり見える丸太小屋にたどり着いて扉を叩いた。丸太小屋からは窓にカーテンが閉まっていて、中の様子は見えないが誰がいることはわかっていた。勇はなかなか扉を開けてくれないのでなんとか扉を叩いてると竹田博士が扉を開いた。勇は竹田博士に、「夜分すいません！ 相生勇と申します！ 頼みごとがあって訪ねました」と言った。無精髭を生やした年配の竹田博士は、「なんの用だね！ なんか用かね？」と聞いた。勇は、「人狼から人間に戻すための血清を譲ってもらえないですか？」と答えた。竹田博士は、「それをどうするつもりかな？」と聞いた。勇は、「蝦夷地まで黒龍丸に乗ってきた摂津国の浪士たちを人狼からもとの姿に戻してやりたいんです！」と答えた。竹田博士は、「過去の蝦夷地にエゾオオカミとニホンオオカミがいた。エゾシカが餌だったエゾオオカミは移民した浪士たちにエゾシカを捕獲されて毛皮と肉食にされた。アイヌ人にとってカム

イ（神）と呼ばれたエゾオオカミが餌を奪われて家畜を襲う害獣と呼ばれるようになって駆除されたニホンオオカミが冬の大雪に絶え切れず餓死した。私はエゾオオカミの絶滅の危機を救いたくて狩で致命傷を打ったエゾオオカミが倒れているところを見かけて生き絶えるまで長年に渡って研究してきた獣が人間となる実験をエゾオオカミにたくして回復と共にエゾオオカミは狼男に蘇った！これで狼一族が繁殖すると信じた。私は野生犬と呼ばれたエゾイヌのエゾオオカミを救った！」と言ってさじを投げた。勇は、「いや！残念ながら救えていない！俺が狼男を仕留めた！狼男はまだいるのか？」と聞いた。いけ好かない竹田博士は、「いるかもしれんが、いたとしても血清を打ったところで人狼は減るものではない」と答えた。勇は、「そういう訳にはいかない！血清を出せ！」と言って竹田博士に斬妖刀の刃を向けて丸太小屋に入っていった。勇は、「血清はどこにあるんだ？さもないとこっちから探し出してやるぞ！」と言ってとっかかろうとした。いびつりな竹田博士は、「わかった！これはまだ4人分しかないがいずれその分の血清を作り出すことを約束する」と言って勇に血清を手渡した。勇は、「約束したからな！たくさん血清が出来たときにまたきます！」と言って丸太小屋から外へ出ていった。竹田博士は床下の入り口に繋がった洞窟の中へ入って見ると、檻に入れた狼男が脱出していることに気がついた。勇は森の中で首がさまよってるろくろ首を見つけ出して再び首をもとに戻したら、ろくろ首で赤ずきんの初音を囀にして、狼男でなくて人狼を呼び起こした。人狼たちがやってきて、直寛と浪士たちに戻った。直寛は勇に、「血清はもらったのか？」と聞いた。勇は、「もちろんだ！だけど4人分の4本しかない！」と言った。直寛は、「わしらだけでも人間に戻れたらあとのことはどうにかなる」と言った。直寛と浪士の3人は血清を打って手足の毛の長さがもとどおりに戻っていった。直寛は、「二度と満月の夜に、人狼にはならないで済む」と言って喜んだ。直寛は勇に、「ありがとう！これで直美に会えるし妻と直美の兄妹たちと会える」と言った。勇は、「狼男と人狼たちに襲われて脅かされた村人と浪士たちを救いたい。恵まれない人狼になった浪士たちを人間に戻して、牧場や農場などで仕事を与えたいんだ！」と言った。直寛は、「わしは東京では政治家をしちよったが、キリシタンであることがバレて免職となった！これからは教会を立ち上げて牧師になることに決めました。そう言えば名前を聞いてなかったな？」と聞いた。勇は、「わかりました。俺は伊賀の忍びで相生勇と申す！」と答えた。浪士たちがそれぞれの村へと帰っていった後から勇が隼に乗って直寛を後ろに乗せると旭川村に向かっていった。隼に乗った勇と直寛は旭川村にたどり着いて宿に戻って直寛を直美に会わした。ごさかしい直美は直寛に、「父上！母上と兄上二人と妹は無事にいるの？」と聞いた。直寛は、「大丈夫や！十勝国の牧場で無事に生きてるぞ！」と言った。直美は勇に、「兄ちゃん！ありがとう！また遊ぼうね！」と言った。直寛は、「勇さん！げにありがとうございます！この恩はいっしょう忘れん！」と言って直美を連れて宿から外へ出ていった。勇は寂しくなって、狼の森にろくろ首の赤ずきんを置き去りしていたことを思い出して、狼の森へ急いで引き返した。狼の森にたどり着いた勇は、もしかして今頃、ろくろ首で赤ずきんの初音が狼男に襲われていないかと心配になった。勇は森を逸れていったろくろ首の赤ずきんをやっと見つけ出した。勇はろくろ首の赤ずきんに、「大丈夫だったか？」と聞いた。ろくろ首の赤ずきんは、「大丈夫なはずないでしょう！私を置いてかないで！」と答えた。赤ずきんをはずして初音に戻った。悩まし

い初音は、「首を長くするほどでもなかったけど暗くて怖かった！」と言った。勇は初音に、「おまえ意外と可愛いな！」と言って一目惚れした。勇は初音に、「もしよかったらこれから長旅を一緒に付いてきてくれないか？」と聞いた。初音は、「私は行く当てないから喜んでいくよ！」と答えた。勇は単に乗って初音を前に乗せて旭川村の宿へ戻っていった。3日後にて、超人的な力を持った勇は物の怪退治を司る物の怪ハンターとして明治天皇の命じられて貢献できた。日本が誇る勇は社会征服を企む三冠王を追って世界大戦を乗り越えて時空転送したが、世紀末に行くはずだったのに正確じゃなかった。烏天狗と雨河童と同じ三冠王の鬼夜叉（おにやしゅ）が2012年に設定していたからだった！ノストラダムスの大予言は正確に1999年より13年後の2012年が正しかった。この年で地球が滅びるという説があったとことを思い出した。西郷隆盛は倒幕してから政治が変わらないと新政府に反乱した。1877年に借金のあった薩摩藩の藩士の隆盛は、沖縄で採れたウコンを安く買い占めて、他の藩士などに高く売りつけたお金で借金を返してから武器など買い占めて日本最後の内戦の西南戦争が起こした。熊本城近くで西郷率いる薩摩軍と新政府軍が一騎打ちした。薩摩軍は鐔の小さい刀を持った示現流の侍が新政府軍を刀で斬り裂いて行って、槍で突いて行って、力士が新政府軍兵を放り投げていった。新政府軍は大砲とガトリング砲で撃って、新政府軍兵は火縄銃と砲撃で薩摩軍の力士と侍たちに向けて撃って行って、炸裂した薩摩軍を下した。隆盛は反乱を起こした罪と侍の時代を終わらせるために自害した。隆盛は龍馬が暗殺されてなかったら自害をしなかった。熊本城は内戦で焼失した。大臣になれなかった政治家の隆盛は1883年に外交接待する鹿鳴館の舞踏会に出席しなかった。勇は未来にいた時から図書館で歴史を学んで知って、歴史を塗り替えたらいけないと思って命懸けの戦いに挑んだ。勇はいびり屋の竹田博士が目論む陰謀の罟を抑えたと思ったが、狼の森の中に人狼じゃない狼男が現れる噂が立ち村人たちと浪士たちが銀の弾の入った猟銃を持って狼の森へ向かっていった。生き延びた狼男は人狼になった下等浪士たちを集めて人間たちに反撃することを誓った。森の中で浪士たちは村人たちを援護することにした。浪士と村人たちは人狼たちが現れたら猟銃で撃っていった。人狼にかぶりつかれて倒れる浪士たちと村人たちもいれば浪士たちと村人たちに猟銃で撃たれて倒れる人狼もいたために確実に浪士と村人たちと人狼たちは減っていった。そして、暗黒の覇者の狼男が現れた。狼男は狼男は浪士と村人たちに襲うかろうとしたときに現れた竹田博士は、「待て私だ！これ以上は人間に復習することはやめろ！この森の中で息絶えていたところを保護してやった狼を第二の狼男に生まれ変えた。おまえたちの生みの親だ！狼一族を永久不滅にしたかったんだ！」と言った。狼男は、「おまえは親じゃない！ただ俺たちを実験台にただけだ！」と言った。竹田博士は、「おい！おまえ話することができるのか？なんなら狼に戻してやってもいいんだぞ！私に逆らう者などいない！なぜなら私が生みの親でボスだからだ！狩りをして絶滅の危機に追いやった人間たちにいつまでも復讐しなくてもいい」と言って布に包んだ大量の血清を地面に投げ落とした。狼男は、「俺はなァ！満月の夜に人間を喰べて狼男になった人間だったから狼に戻らない！人間に戻るだけだ！」と言って竹田博士に襲いかかって行って、竹田博士を咬み殺した。狼男は浪士たちと村人たちを襲いかかっていったが、浪士と村人たちに猟銃で撃たれてた。浪士たちと村人たちは狼男を倒して、旗を上げてボスが遣られると怯んで立ち向かえな

い人狼たちに血清を打って行って、純血である人間に戻した。これで残虐な戦いが幕を閉じた。浪士たちは農場などで働いた。村人たちは農家などで安心をして暮らした。勇は三毛猫の幸運の招き猫を持っていたお陰で幸運に恵まれた。一匹狼の黒い人狼の舜は、森の中で身を隠して行くあてもなくさまよい生き続けた。(終)

開花

開化

餓狼の血族

奥付

奥付

Ninja Soul 2 忍者魂戦記

<https://puboo.jp/book/125680>

著者：八島 聖彦

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/nagisa825/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/125680>

電子書籍プラットフォーム：パブー（<https://puboo.jp/>）

運営会社：デザインエッグ株式会社

Ninja Soul 2 忍者魂戦記

著 八島 聖彦

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
